

主 淨

昭和三十三年
三月

郵便物認可（毎月一回一日発行）
運輸省（特別機承認雜誌第三五二）
印刷 昭和三十六年一月一日発行

第三十七卷

第一号

王堂
圖

新年号

☆☆信仰の「泉」浄土トラクト☆☆

新刊

浄土トラクト

在家の方々の為の

村瀬秀雄著

浄土宗勤行の解説

新書版九〇頁
定価七〇円
送料八円

待望の書「浄土宗勤行式の解説」愈々刊行

旧版「浄土宗日常勤行式解説」を全面的に

改訂、版も持ち易い新書版として刊行

(百部以上五分引送料無料)

大正大学教授 佐藤良智著

真理のはなたば

新書版
定価七十円
送料八円

若き人びとにおくる仏教入門

青年会 婦人会に最適のテキスト

東京都品川区上大崎一ノ七八二

申込先 法然上人鑽仰会

振替東京八二二八七番

浄土正月号 目次

表紙・扉絵

さし絵・カット

結城天童

加藤金一

生身のほとけ……………鷹司誓玉……………(14)

崩れゆくもの……………戸川靈俊……………(18)

牛雜談……………塩田良平……………(10)

ほんとうのもの……………合田微雪……………(36)

三十六年を迎う……………椎尾弁匡……………(2)

一九六一年宗教界展望(上)……………白幡憲佑……………(6)

中国綺譚 牛異三題……………牧尾良海……………(22)

日本靈異記に出てくる観音様……………Y・S……………(9)

国際宗教史会議に出席して……………佐藤賢順……………(34)

法然上人の感化……………村上博了……………(28)

高僧伝 山崎弁栄……………大橋俊雄……………(30)

新篇百喻経(10)……………伊東拳位……………(21)

弥陀信仰の二つの世界……………鹿島成唯……………(24)

一扉の御法語……………(39) 一童心仏心……………(20)

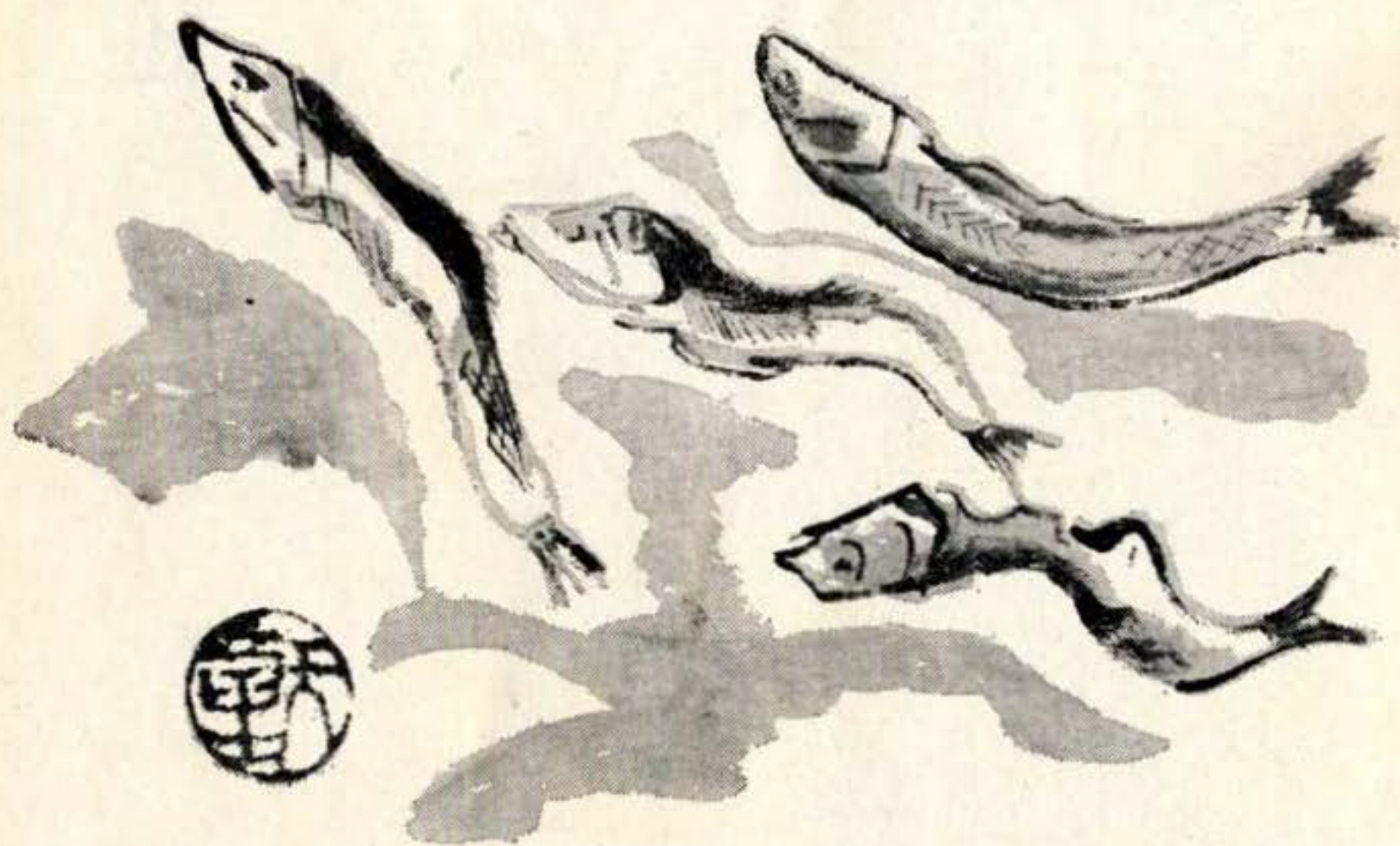
仏祖のことば(1)……………宮林昭彦……………(32)

浄土

正月号

悪人をもすて給はぬ本願ときかんに、まして善人をばいかばかりかよろこび給はんと思ふべき也。一念十念をもむかへ給ふときかば、いはんや百念千念をやとおもひて、心をよび、身のはげまれん程ははげむべし。

法然上人御法語



三十六年を迎う

椎 尾 弁 匡

(大本山増上寺法主)
(文学博士)

年去り年来り、昭和三十六年が来ました。明治四十四年には、法然上人の、七百年を迎えたように、今は七百五十年を迎えることになりました。前の考え多事であったことを思いうかべる。当時、まず明治三十八年、国は大陸の戦争で旅順の陥落、奉天、長春の勝利、海では日本海の全勝について、日露の講和となったにかかわらず、警察の焼打ちなどの騒がしさは、私には、年始めの母の死に次いで、「梵天と仏陀」の論文を未完成で提出したことや、陛下の七月卒業式の臨御に感激を深うした後、各所で、新仏教を講じた中に、広島は最も影響の大なるものであった。それは第五師団長真鍋中将の質問に発する。その時夫人を葬うに浄土宗に行い難きは三疑ある為、一つは、釈迦仏をかくして、阿弥陀仏だけを崇める。二は、その弥陀を超日月光仏と言うも、月なく、日没する夜には仏光は無く、電燈等が必要である。三には、我ら

は、五障三従の女人、十惡五逆の凡夫、徒づらものというが、師団では、若人を陛下の股肱、国家の干城とたのませられるといつてはげましても、なをづるける。それに、いたずら者等と云つていては、兵士の教育ができぬ。生きて御役の勉まらぬようなことで極楽行きを望むわけにはゆかぬというのである。会見後、この疑いが解けたので、妻君の葬儀のやり直しをするというのであったが、私は、数度も葬儀をするには及ばぬ、それは世間のわずらいにすぎぬ、それよりも、三つの疑いなどで、社会を騒がしたのは、平生心すべき、宗意を心得ぬからである。葬儀の変りに相伝を受けるが良い。この為に師団長官舎で岩井僧正を迎え、全将校を集めて、五重相伝を受けた。

私は、その頃、ドイツ行を中止して、宗教大学に教務を執ることとなり、学生の更生、社会事業の開拓と同時に黒田学長からの要望で、仏教界に、その研究者なき、成実、三論、南北戒律等を研究することになったが、一方には未完の論文をまとめ、東洋史の検討に務めた。三十九年は、これら内外の研學ますます多事にして、四十年もその半を過ぐ、身辺新らたに早大の出講をも求められ、同文館哲学辞書の仏教語の選定、特に未研究語の起草をたくせらる。この時、宗学部長として宗教をも扱うこととなったが、當時停滯した宗務はすこぶるやっかいなものであった。ことに、三十五年以来、七百年御忌予習の伝導、学園建設等、ことごとく躍進を要したので、着々面目を新たにせしめた。その際真鍋將軍は大師号加謚のことをたずねられたので、すでに、五回も大師号をたまわつておるので加謚を求めず、法然上人のみでゆく方が、青年にも親しみやすく、保たれ易いと答えたが、伊藤公その他の意見もまとめて、要求されるので、ついに要人を集めて再議することとなり、ついに一切陛下の聖断をおおぐこととなった。中途いく多の異議が生じたが、二十二年、宗務をしりぞくまで、着実に予定を推進し、四十四年一月、管長は、宮中のお召しをこうむつた。衆知の如く明照大師号をたまわり、めいしょう大師と読ましめいとこの聖意をも伝えら

れた。これより、内外等しく鴻恩に報じ、新たに、祖徳を仰ぎ、四月の御忌に、全国よりそ廟へ、京都へと、集中することとなった。私も、学徒百五十をひきい、洛内各所に、讃仰の法演を行った。

五十年前の回想に、文筆をついやしたが、その後、七百回忌には、道俗多くの協力を頂いたが、結局、知恩院営繕に主力を傾けてしまった。もし七百五十年も、かくのごとくなれば、もっと、多くの力を営繕に奪うであろうから、十年足らずに、大会を勤め、営繕すべきものを、営繕してゆくとよいとして、宗祖降誕八百年、開宗七百五十年、善導忌千二百五十年、鎮西忌、三祖忌とを予定した。然るに、七百年の時、三十七、八年役に中断されたように、これらの行事も予定通りまいらず。殊に昭和の大戦大敗と、これに伴う、内紛とにより、七百五十年を目標として、実行すべき、目標すら定らない。七百年に当っては、二十才前後の若者が競って研索したにかえりみ、懸賞募集を申し出たが行われず、やむをえず私が、単独に、増上寺を中心として、三十三年より三十七年度まで五年間に、約百ヶ条の行事を期して、今やいずれもその歩を進めてはいるが、微力誠に鈍いことである。只次の一事を、明らかにして、大方の完成へ考慮されることをお願いする。

釈尊の成仏は無我の大道を成就されたことと言いながら、釈尊の肉体に内在するかと考えたり、八十入滅は、無余大涅槃界に入りたまえりと言いながら、仏がなくなったと考えたり、報身常在とか、眞実法身とか言いながら、現実せぬ理念の如く考えたり、仏教の眞意が失えて、最もよく原始仏教を保存するかに思われる。インド周囲の国々、ビルマ、セイロン、シヤム等の三蔵経でも、持律状態でも、全く釈尊の経意を失ったかに見えるから、西に伝って変形した宗教や、北東に伝った大乘教団は、釈尊の原意と違うと

云われれば、そうかと思われる。然し二千五百年を過ぎたと云われる今、四方仏教徒が、しばしばネパールやニューデリーに集ったり、全世界の研究成績やで、正統なる仏果仏国を認める仏教へと立直らんとしておる。釈尊が単なる、釈迦悉達の名でも、一個の肉体にでも限られるものでなく、教えを説けば、教主も教説も、集って仏である、その講堂に、何百千集って静聴する場合でも仏場である。祇園でも、鹿苑でも、東講堂でも、竹林でもそのまま仏場である。かつて釈尊が居られた、遺跡であるという意味でなく、その人も物も依正不二の仏である。これが正しく受け取れるとき、仏も阿弥陀、その国も阿弥陀仏国、その人も阿弥陀仏国人天であり、南無阿弥陀仏するものには、小さくも大きくも、皆な仏であるから、この仏教は浄土教である。この仏教の一部を、凡より聖に昇る道として見れば、わけ昇る麓の道は種々の聖道となるも、どこでも、月に照らされる光の歩みであり、浄土往生の姿である。この意味に於いて、浄土門がただ聖道門と対立したり、八万四千門の一門たるに局まるべきものではない。さように局まるところだけを固執するものには固執する理由もあるが仏教の真意ではない。念や民主主義では何人も同じ尊さを持つと考え、社会主義では、子供も貧民も同じ人権を持つべしと考える。この主義權利にこだわるところは不十分と考えられても、貴賤、貧富、我執、階級の古い考えからは大きく発達しておる。真の仏教はこの発達し行くところに仏国浄土を信ずるものである。これを、七百五十年に、明らかにすることが祖恩を報じ祖徳を崇む所以である。



1 9 6 1 年

宗教界展望(上)

——神道と新宗教——

白 幡 憲 佑



一九六一年は人間による宇宙旅行が実現されて人類文化に新しい展開がみられると期待される年である。若し、この宇宙研究が達成された時には、第一に国際情勢で予測も出来ない飛び入り事件的な変化が現れるかもしれない。この大変化はさておいても、一九六一年には約二十ヶ国くらい国連新加盟国が誕生しそうなのである。そして此の新加盟国の殆んどがアジア、アラブ地域に属するもので、「世界に於ける第三勢力」の発言が注目を浴びることになりそうだ。これらの中小国家は独立まもないとあって外部からの経済援助など支援の手がさしのべられる時に最も身近かな指導・援助国となれるのが日本であろう。これは池田内閣の経済、外交政策の重要なポイントとなってくる。又この機会を利用してアジアのリーダーシップを握って戦前なみの強国への夢よ今一度を願う野心も表面化してきそうである。

それには先ず国民精神の建直しであると考えて「神ながらの道」の再興をはかってきた。

数年来、論争されていた伊勢神宮の国家管

理について政府では昨秋十月二十四日の衆議院解散のゴタゴタ裡に公式見解を発表した。

「神宮の神器(御鏡)と皇室との関係は不可分」であるとハッキリ表現した内容である。

ところで、この神器を政府見解が「皇位と共に伝わるべきもの」と明言したことは伊勢神宮の国家管理への理論的布石とみるべきだろう。この重大問題を審議した宗教法人問題特別委員会(委員長松永東)の果した径路は、

まず宗教学者、宗教界の各代表より神宮問題についての意見を聴取したが、神道を除く仏教、キリスト教、新宗教、教派神道の全部が反対を表明した。次いで招れた宮内庁当局者もたいして賛成の色をみせなかったのと。こんな過程を示して何時しか委員会のヤリトリが耳目にとぎれがちになった頃、例の安保問題が沸騰して政府も宗教界も輿論の全ては安保へ安保へと注れてしまったのである。しかし消息通によればこの安保騒動のさ中にも委員会は極秘裡に開れて佐藤試案(佐藤尚武神宮奉讃会長の提出案)を中心に神宮国管化を進めていたのであった。

こうして此の問題を推進してきた神宮、神

社庁主脳部と自民党の一部の政治家達は理論上の道は開けたとばかりに、今度は靖国神社の国営化実現を決めているのである。伊勢神宮と靖国神社によって表面に出た一連の動きは単なる神社界の失地回復の運動と云い切れるものではなく宗教界の基本的問題にふれてくるものとみるべきなのである。つまり憲法にうたっている政教分離を原則とする現行宗教制度を現状維持にもっていくか、又は旧憲法時代に逆もどりさせて国家神道を復活させるかの岐路に立たされたのである。

これらの憲法をはじめとする宗教関係の法制問題が今春から政府声明を中心として更に政治問題にまで進展して論議されることが予想できるのである。

またまた統一的な国民精神の必要性が論じ始められてきた時に神職で教員を兼ねている人達の約二百五十人が日教組の思想は中庸を欠いて左傾し過ぎていると反対して日教組を脱退した事件がおきている。この神職教員達は吾々の主張こそが日本人の最も正しい思想だと述べているが、その内容は日教組の左傾に対して、あまりにも「敬神尊皇」に過ぎる

様である。この国民精神の復活運動も今年は神社界の動きの大きな中心点となるのではなからうか。

神道が現在の政府権力と結んで復活を意図すれば、近き将来の日本は……。と豪語するのが日蓮門下の異端児創価学会である。

昨春に池田大作を会長に推してから青年会長の陣頭指揮で青年部の組織の強化に乗り出した。全国を十一ブロックの総支部に分け、部長十三名、副部長十八名を任命した。更に部隊数も百二十二から百六十六に増設させ従来の企画室、地方参謀室を廃止して部長、副部長と一本化させていった。昨年十一月に二十万名と発表されている此の青年部は今後も地区的な折伏攻勢の先頭に立つと共に一般会員の団結の牽引車の役割を期待されている。

だが学会の中核とみられるこの青年部の強化策は一方では「信者カク得が頭打ちになった」ための打開策だともみられている。「国内ゆきずまり説」を証明する訳ではないが昨秋十月に池田会長が二十五日間に亘ってアメリカ各地を折伏旅行した。学会本部では「ゆ

きずまり」どころか東洋広布から世界広布なのだと大スローガンをかかげている。アメリカでは総支部を設けてその下にロサンゼルス支部としてニューヨーク、ワシントン、ケンタッキー、シカゴ、ネバタ、サンフランシスコの七地区とブラジル支部にカンピナス・サンパウロ、アルジアの三地区を設けた。このように小規模ながらも組織を結成させた様だが、しかし東洋広布は沖縄のみで終り、伊豆大島では殆んど折伏効果があがらなかったとのことである。今年は早速、一月に細井大石寺貫主と池田会長が東南アジア、インド方面を歴訪する計画があるが、この海外広布によって従来の対邪教内容に多少の変化がもたらされて一部幹部級を動揺させている。それはキリスト教を邪教の範疇から除いて単に「依鬱な宗教」と改称することを会長が命令したのである。宗教分野では妥協を認めないと主張した教学や布教方針も、アメリカさんだけに……とあってはいささか矛盾をとおりこしい。世帯を広げ過ぎて内部のボロを隠し切れない訳でもあるまいが全国の大支部を続々と

細分化しはじめている。(これを称して支部新設十六ヶ所と発表するのは学会らしい)この分化作業は会員の脱会防止には最上の手段であり又、折伏活動にも人海戦術がとれて便利とのこと。今年も二、三支部の細分化が予定されている。

又、学会として日蓮正宗への援助は昨年十一月までに十二ヶ寺を新築しているが、この新寺建立には学会対正宗の対立と云う暗雲がただよっているらしい。もっとも互いに位身を極めた上層部はヤアヤアの仲だが下部に於て学会の集会を拒否する寺が出たりして対立の激化が表面化しない中に寺側を宣撫しようとする狙いが含まれているのである。そして故戸田城聖の遺約である大石寺の大客殿の建立に今年は着手するらしい。建築費用は既に集っていると学会本部では云っているが、経済状態については徹底した秘密主義の学会のことだから細目は判らないが、準備の出来たことは事実のようだ。

ともかく海外と云う宣伝価値をもった布数と共に今年も強引な折伏の続く事は間違いないことである。(筆者 中外日報記者)

正月の行事

元

旦

(一日) 説明する迄もなく、一月一日の事。国民の祝日に関する法律では「年の始めを祝う」と定義し、文部省は「年頭挨拶の交換会、適当な場所に集つてお互の幸福を祝う」と説明している。ともあれ私達は、この年の発足を明るく祝いたい。

修正会

年のはじめに当り、お寺に於て一日或は七日間、世界の平和と民族の安泰を祈念して行われる法会のこと。み仏の限りなき大慈悲と先祖の深い徳に支えられて、清らかな心を甦らせ新しい年にはげみを誓うのである。

その昔、聖武天皇の神護慶雲二年(七六八)に諸国の国分寺において行われたのが始まりで、千二百年を経た今日なお各寺々で承継がれ修せられている。

成人の日

(十五日) 昔では男の元服、女の髪上げ。満二十才を迎え、大人になったことを自覚し、みずから生き抜こうとする青年を祝いはげますと云うこの日、年令的な大人ではなく、精神的にも大人になって、一個の社会人として生きて行くことをのぞみたい。

御忌

忌

(廿五日) 浄土宗開祖法然上人は建暦二年(一一二二)の一月二五日、八十才で京都大谷の禪房(知恩院)でおなくなりになりました。御忌と云うのは元来、天皇、皇后等の御忌日に行われた法要を意味しましたが、後柏原天皇が「自今孟春の月に遇はば宣しく京畿の門葉を集合せしめて一七昼夜、法然上人御忌を修せ」との詔を下され、公称する様になった。念仏の門に入るものの忘れがたい日で上人の遺訓をしのび、私達の心の道標としたいものです。

日本靈異記に出てくる観音様

日本靈異記というのは平安時代の初めに出来た仏教説話であります。此の中には、一一六のお話が出てまいりますが、その内で仏教に關係するお話が一〇四あります。この一〇四話中でも特に観音様におすがりした話が一番多く出て来ます。ですから、日本靈異記は観音様の信仰が中心とも言える程です。ところで何故そのような観音様のお話が沢山現われて来ているのかと申しますと、平安時代の初めには観音信仰が非常に盛んであったからです。

この観音様の信仰は、印度に於ては西暦紀元頃より二世紀頃に存在していたのです。今日私達が観音経として親しんでいる法華経の中にある観音経も、実はその頃既に出来て居りました。それがやがて中国に渡り、我国に伝えられたのであります。我が国では聖徳太子の頃、観音経と共に観音様の信仰が入って参りました。そして、聖徳太子の仏教を弘める御活動に依つて観音信仰は奈良時代から平安時代にかけて次第に全国的になったのであります。

日本靈異記に現われて来る観音様には、先程申し上げました観音経に依る観音様と、我々浄土宗のお経、つまり阿彌陀様を信仰している人達のお経「観無量寿経」に出てくるところの阿彌陀様の脇士としての観音様等々、諸々の観音様が出てまいります。しかしこれらの中でも、観音経中心の観音信仰が、日本靈異記では一番多く目立っています。即ち、どんな危険な時でも一度観音様の御名を唱えれば誰でも安全に救われると言う、つまり信仰したお利益が直ぐにこの世にあらわれると言う現世利益の信仰が中心となつて居るのであります。それは苦しい難行を必要とせず、まことに簡単でありますので、昔の人達の考えにも良く合つたのでありましょう。この観音経の観音様は、三十三種類の身を現して随時皆さんの苦しみを除くという非常に有難い菩薩です。普通観音様の变化には六観音と申して、聖観音、十一面観音、千手観音如意輪観音、不空罽索（或いは堆毖）

観音、馬頭観音が有りますが、日本靈異記には、この中の十一面観音と千手観音

の二種類の観音様が出て来ています。ところで、先程もちょっと触れましたが、脇士の観音様について述べてみましょう。皆さん方浄土宗の信仰をお持ちの方々は、阿彌陀様の両脇に観音、勢至と二菩薩並んでいるのを御存じだと思います。この観音様は今迄お話した観音経系統の観音様とは違い、観無量寿経に出てくる観音様で、阿彌陀様の使者として、勢至菩薩と共に脇に侍して阿彌陀様をお助けし、広く世の中を救済なさる阿彌陀様の信仰に附随したものであります。

この日本靈異記は、景戒と言う僧が書いたものでありますが、彼が取り上げた仏教説話の中に此の様に観音様が多いという事は、当時観音信仰が非常に盛んであったことから、これを以つて善惡現報、因果の恐ろしさを示そうと考えた事が良く判ります。この日本靈異記は、中国の冥報記、般若驗記に倣つて日本の実例を挙げて因果応報の理を説いた説話集であり、これが後に三宝絵詞、今昔物語、其他幾多の説話集を生むきっかけとなつて居ります。

牛 雑 談



塩 田 良 平

十二支の中で我々の生活に直接結び付いて
いる動物、言わば家畜という類の中で牛、
馬、羊、鶏、犬がある。この中で古くから人間
に労働力を提供してきたのは牛馬である。幕
末国際関係が結ばれ出してから牛馬は食
用となり、鹿鍋の料理法に習って所謂牛鍋な
どが行われて、今では日本料理として世界的
に有名である。尤も江戸時代でも牛肉をそつ
と食べていた例はあるようで、近江の国は昔
から大津牛で有名だが、彦根藩主伊井侯は毎
年赤斑牛の鞍下、つまりロースを毛つけのま
ま味噌漬にして將軍や御三家へ薬用として献

上した。ところが直弼の代に至って殺生が嫌
いで献上をおこたっていたところ、水戸の烈
公が大の牛肉好きだったので、ある時江戸城
で牛肉の催促を直弼にしたそうだと。ところが
直弼は「殺生は嫌いでござる」とにべもなく
断ったので、それ以来、水戸と彦根とは仲が
悪くなった、という噂がある。屑唾ものだが
食物のうらみは恐しいといういい例だ。尤も
近江では赤斑牛だけは昔から食べても穢れな
いと言われていたそうだと。

牛は馬と同じく元来は大陸のもので、古代
に舶載されたものだが、従和な性質だが角が
生えていて恰好が恐いので、「日本釈名」
などによれば「うるさし」「うらめし」の言
葉を略して「うし」と名付けたそうだが、こ
れも甚だ曖昧な語原で、牛に対して甚だお氣
毒だ。牛は田をすき車を曳く甚だ役立つので
大人(うし)の如きものなので牛とつけたとい
う同情説もある。しかし、諺などでは牛はあ
まりいいことには使われていない。「牛の小
便と親の意見は長くてもきかぬ」つまり牛の
小便は肥料としてききめが薄く、「牛の小便
十八丁」などはだらだらと長いことをいう。
その態度の鈍重なことに關しては、ものの間

に合はぬこと、遅れて来ることなどを「牛に乗つて来る」と言ったり、鈍重で手際の悪いことを「牛の籠抜け」という。誰でも知っている「牛の歩み」というのは、所謂牛歩で進歩の遅いことをいうのだが、ただこれは「牛の歩みのよし遅くとも」といったように着実の意味があるから、これはまだ救われているだろう。「商は牛の涎」もその一例である。

あの女は「牛の糞」だという。これは外側が硬くて内側が軟かい。危つかしい女を言うのである。その代り、この牛がその性質にさからうと「牛の一散」などといって、思慮もなく無茶苦茶に走りだすことになる。あんまりいい譬ではない。大体馬と並べると牛の方が歩が悪いようで、「牛を馬に乗り替える」と言えは悪いのをいいのに取り替えるわけである。しかし牛も「牛に曳かれて善光寺詣り」などということになると、やや牛に功德がついて来る。昔信濃の善光寺の近所に七十に余る姥がいたが隣の牛が洒^きしてあつた布を角にひっかけて善光寺に駆け込んだ。この姥が追いかけて初めてこの寺の霊場であることを知って仏に帰依したという話が「本朝俚諺」にある。これはいい意味で元来そんな気持はな

かつたのだが、ふとしたことから他人の勧めによってその道に到達するということ、今では自分の意志から離れて他人と行を共にすることに使うが、実はその行は善行の意味である。

牛は馬と違つて外形がのつそりとしていて利口そうに見えないから、そこから精神的な要素を引き出した例はあまりない。それでも仏性のある牛の説話は中々多い。「古今著聞集」によると、近江国高島郡に阿闍梨勝覚という僧がいたが、その父の家で飼っていた牛が夜毎に必ずうめく。ところがその呻き声は何だか言葉のように聞えるので人々が怪しんでよく聞くと阿弥陀經のような調子である。誰が聞いても確かに經文に違いないというので勝覚が先頭になってこの牛がうめき初めるころを見はからつて声を合せて阿弥陀經を誦むと前後がちゃんと揃っている。そして必ず一晩に一度は經を誦むというので、これは前生に阿弥陀經の持者が何かの罪によって畜生道に入つて牛に生れ変わったのだろう「哀れなること」だと書いてある。人間が悪いことを

して牛に生れ変わるという話は「今昔物語」などにもある。大和国添上郡の人で十二月にはうさんと呼んでお経を誦んで貰つて前生の罪を懺悔するのだが、その僧侶が読經の後でその夜は泊めて貰つた。その家主がかけてくれた衾がなかなか立派なので、明日になったらお布施をいくらくくれるか知れないが、それよりこの衾を今夜の中にそつと頂戴して帰ろうというので、皆が寝静まつたのを幸、この衾を盗んで出ようとする声が出て、「それを盗む勿れ」という。驚いてふり返ると人は居ないで一匹の牛がいる。牛が人語を發するわけはないと、怪しみながらさすがに氣がさしてこの僧侶は盗みをやめて、そのまま眠^{やす}んだ。その夢に例の牛が現れて我はこの家の主人の父であるが、前生に人に与えようとて息子にだまつて稲を十束盗つた。そのために現世で牛の身と生れ變つて罪をつぐなうのである。しかるに汝は出家の身でどうして人の物を盗み出すのか。若し我が言葉を嘘と思うならば、明朝我が爲に座をしつらへよ。もし我がそれに座れば、父であることが判るであろうと言つたまま僧侶の夢は醒めた。そこで、その坊さんは家主に耻を明かして夢の告げを語

ったので、主人は驚いて、藁の座をしつらえて牛に向つて「若し汝我が父におわさば、この座に登り給へ」と言つたところ不思議やこの牛は膝をかかめて藁布団の上に座つた。これを見て主人は声をあげて泣き、「年比知らずして父君を働かせた罪を許し給へ」というと、その牛も涙を流してその日の中に死んでしまつた。考えてみれば、この僧侶が若し悪心を持っていなかつたら、この牛の前生は何であつたかは判らなかつたものを、これも因縁であるというのが、話のあらましである。どちらも前生は人間だつたといふことで、牛に神秘思想が結びつけられた例である。

同じ「古昔物語」に、或る百姓が牛の親子連れを持っていた話がある。秋頃田圃の杭につないでおいだが、うっかり牛小屋に入れるのを忘れて寝てしまつた。ところがその夜狼がやって来て、子牛を食おうとするので、母牛はそれをかばい、丁度築垣がある処に狼を角でおしつけて腹に突きさした。狼は動かなくなつたが、若しこの角を引き抜けば又子牛に噛みつくだろうと思つて、この母牛は一晩中狼を堤に突きさしたままじつとしていた。翌朝になつて飼主の百姓は、そこへ駆けつけて

一晩中狼を離さなかつた牛を褒めて「かこしかりける奴かな」と言つて家に連れ帰つたといふ。作者はこの後で「獣なれども靈ありかしこき奴はこれにぞありける」と結んでいる。犬や馬には、よく心あつて主に忠義を尽す例はあるが、牛でも昔からこう言つた美談をもつていたわけだ。「栄華物語」などにも「牛仏」の話がある。逢坂の近くの関寺といふところで大伽藍を建ててに當つて、一疋の牛がどんな大木でもやすやすと配んだ。ところがこの寺の聖が或夜の夢に「我は迦葉仏なり、この堂を建てさせむと思つて牛に成り変りたるなり。」とのたもつたので、このこと大評判になつて、藤原道長を初めこの牛を参詣しないものはなかつたといふ。黒い小じんまりした牛だつたが、丁度御堂の弥勒菩薩開眼の日に、堂の開りを三辺めぐつて死んでしまつた、といふ話である。この話などは罪業の人の生れ変りとしちがつて仏の化身だから、こういう牛になると大分価値が違つて来る。何しろ牛王と言へば最も優れた牛で仏菩薩に譬えられ、牛王尊者などといふ仏様もいるくらいだから牛にも靈性が認められたことは事実である。尤も牛頭、馬頭などというのはいけな

い。あれは地獄の鬼卒を指すので、牛の頭で人の手を持ち、両の足には牛の蹄があり、そのかわり馬鹿力を持っている怪物である。しかし、牛頭でも支那の牛頭山は法融禪師がいたところで、蜂の形が牛の頭に似ているから名付けられたので、ここの梅檀は牛頭梅檀と言つてすばらしい句でこれを身体に塗れば日にも焼けないといふ香木である。

このように牛に因むいわれを書いてゆけば際限はないが、何と言つても昔牛が華かな存在を示したのは、農牛より牛車の牛である。車引に出て来る飾り牛、葵祭の牛車、その他「源氏物語」を初めとして平安物語に於ける牛の描写にはなかなか美々しいものがある。かと思つと立派な武器にもなり、木曾義仲の倶利伽羅峠合戦には、四五百匹の牛が角に松明をつけて荒れ狂う大活躍を演ずる。尤も松明を付ける故事は支那にも日本にも沢山の例があり、普断が大人しいだけに荒れ狂つた牛のすさまじさは当時としては大きな兵力になつたろう。闘牛即ち手合、なども巨大な丑体と丑体とが争ふことでスリルを伴う迫力

があり、日本でも古来から行われたが、何と言つても闘牛と言えはスペインを思い出すだろう。「血と砂」や「カルメン」などを通じてみられる華かな闘牛士の一生は牛あつての一生で、瞬間に生死を争うスリルは、情熱的なスペイン人の大きな魅力となつたのである。瞬間にきまる人間の生死といへば、話は違ふが或る男が自分の牛を売る契約をして明日大金を貰ふことになつていた。然るにその前の晩に牛が死んでしまつたので、その男が損をしたと大にこぼしたのを或る人が聞いて、それは決して損をしたわけではない。生あるものが死の近いことを知らないこと、牛ですらそうだ。人も同然で、はからずして牛は死に、持主は生きている。一日の命は万金よりも重い。その道理を知つただけでも大いに徳ではないかと説得したということが「徒然草」にあるが、前後に今の我々に一番関係の深い牛について、少しげびた話だが記しておこう。

この頃は牛の姿は牧場か田畠以外には見かけなくなつた。都会などでは馬力と一緒に牛車を見かけたのは昭和の初めぐらいまでで、

この頃のようにトラックが全盛では牛などとはとても運搬用には使えない。我々のお馴染の牛はもはや一個の動物としての牛でなく、バター、ミルク、かんづめ、すき焼きになつた牛であつて、食生活に於いてかくべからざる存在となつてしまつた。一たい日本の牛がなぜ外国の牛より美味いかというと、日本人独特の飼育法が発達したからだろう。この頃は松坂の牛と言つて半分は伝説めいた丹精をこらした牛の飼ひ方が伝えられているが、日本のように牛鍋、すき焼きを中心として発達した牛の料理は何と言つても舌触り歯ごたえや甘味が重大な特徴となるので、そのために、飼料を選んだり、筋肉をブラシで摩擦したり、日本人らしいいまめなやり方をしなくてはいい味が出ないのである。牛鍋は鹿鍋からヒントを得たということは最初に述べた。一たい何時頃から牛鍋が出来たかという文久二年頃横浜の住吉町で伊勢熊いう居酒屋が開業したのが最初らしい。この肉は神戸の牛を横浜に外国船で持つて来たもので、神戸肉が有名になつたのは、こうした機縁からである。東京で最初に開業したのは、中川嘉兵衛らしい。英国公使館へ納める牛肉を横浜から買つ

て来て売り込んでいたのだが、単に肉屋だけでは将来性がないといふので芝露月町に中川屋という牛鍋店を開いたのがきっかけで、最初は浅い鍋に煮込んでさくも葱だけで後は香物ぐらい。明治七年頃まではお茶も出さなかつたそうだ。来る客もいかもの食いのつもりで来たらしいが屠殺場も出来て肉の血を絞るようになつてからは、臭みもなくなり、次第に客足が多くなり、各所に牛鍋が開店した。多くは料理屋や鳥鍋屋が転業したのだが昔からのもんじ屋（猪を初めとする獣肉屋）で四谷の三河屋とか東両国の港屋とかが兼業に牛鍋をやり出した。中川も神田の淡路町に本店を移して一時は繁昌したようだ。この当時牛鍋一人前三百文ぐらいだったから、今から比べるとそれほど高価ではなかった。牛鍋屋のことは仮名垣魯文の「安愚東鍋」に詳しく出ている。これは牛鍋屋を背景にして、そこに集る客の動静を写実したもので風俗資料としておもしろい。牛鍋が流行したのは勿論牛肉の美味さによるが、もう一つは明治五年正月二十四日、明治天皇が正式に牛肉を召上つたことが大いに流行らせたことになるのである。

文学博士・大正大学教授

生身のみほとけ

鷹 司 誓 玉

信仰とか信心とか云うのは絶対皈依の心、偏え

にすがりつき頼り切る心でございます。仏教徒が

南無阿弥陀仏とか南無釈迦牟尼仏あるいは南無妙

法蓮華經とか唱えますのは自分の信憑する所の阿

弥陀様なりお釈迦様なり或いは妙法蓮華經なりに

対して何の疑いもなく自己の全生命を投げ出して

その摂取をねがい南無（皈依）するのであります。

丁度物も言えない赤ン坊が母親を慕ってオギ

ャアと泣き母親に抱かれれば乳房を求め、満腹す

ればすっかり任せきって何の不安もなくすやすや

と熟睡するように、私の全生命をみ仏様の御手に

あづけて安心させて頂こうとの願いであります。

善導大師は「南無と云うは即ちこれ皈命なり亦

これ発願回向の義なり阿弥陀仏と云うは即ちこれ

其行なり」（観經玄義分）と説かれ「南無阿弥陀

仏」の一と声の中に往生への願と行が含まれてい

る事を明らかにされました。この「往生」という

言葉を近頃では「死」と同義語のように思ってい

る人が多いようでございますがこれは誤りであ

ります。私共の肉体の終りである所の死ではな

く、有限なこの世の生に対する執着や悩みを脱し

て永遠の真理に生きる、阿弥陀仏に皈命してその

御徳である無量無辺の光寿に皈一する事を如来のお国へ往き生れる事として表現したのであって、済度であり到彼岸なのでございます。この済いを求め往生を願う心の根本には自らに対する深い反省慚愧の心がある筈でございます。

浄土宗ではよく信機信法と申しますが私自ら不知不識の間に犯した諸々の罪障を思い人間の力の限界をきびしく認識する、即ち自己の機根を知る時必然的にその脱皮を志さずにはいられません。

然もその脱皮は自分という小さな人間の力では絶対不可能であると気付いた時大いなる力への憧れ、如来へ親近したいという希いがおこりみ仏の教法を信じずにはいられなくなり、所謂「機法二種の深信」に到るのであります。即ち自己反省という事が信仰への第一歩であり、言いかえれば自己の卑小さ醜くさに気付かせて頂いた時が救いの約束された時であり、既に如来の攝取にあづかった時なのでございます。

私が今お供事させて頂いて居ります信州善光寺には御本尊である三国伝来の阿弥陀如来をめぐって昔から人肌の温みのある生身の如来であるとか

その他色々の言い伝えがございます。中でも我が国に初めて仏教が伝わった頃その崇廃問題について当時の二大豪族であった蘇我・物部の二氏の間には大きな争いがおこりとうとう仏像は灘波の堀江に投げこまれたのでありますが、やがて何年か後に本田善光と言う人がその近くを通りかかって水中の如来を発見し、故郷の信濃国まで奉持して自宅の西廂の白の上に安置したのが善光寺のおこりであるというのは多くの方々が御承知の親しみ深い伝説であります。然も交通機関が何もなかった昔のこととて善光は永い道中ずっと重い仏像を背負い徒歩で旅したのでありますが、昼は善光が如来を負い奉り夜は如来が善光を背負い下さったので何の苦もなく速く信濃へ皈る事が出来たと伝えられて居ります。これとよく似た話は中国にもございます。昔印度の国の鳩摩羅炎というお坊様が当時国王が非常に乱暴で仏教を迫害されるので尊い仏像の破壊されるのをおそれ、仏像を負うて中国の方へ逃れ出ようとしたのでありますが、三日目にすっかり力尽きて沙漠の真中で倒れてしま

い後の方からは王の軍隊が追って来るので、仏様

の前に坐りもう私の力ではこれ以上のがれる事は出来なくなりましたとお詫やらお別れの心をこめて一心に最後の勤行を致しました所「鳩摩羅炎よご苦勞だった、これから先は私がお前を負うて行こう」と仏様のお告げがあり仏様に負われて無事に中国に入る事が出来ました。これが更に後世我が国に將來された嵯峨釈迦堂の御本尊様であると伝えられて居ります。これらは自分の力を出しつくし我が身の限界を素直に認めた時如来様と一つになって新らしい境地のひらかれる事を説いたものでありましょう。はじめは本田善光なり鳩摩羅炎なりの「人」が仏様を背負って歩いたのではあります、自分が歩いているという自力の意識の強い間はいろいろな執着で我れと我が身を縛り重荷にあえがねばならないのであります。然し私にそんな力があるだろうか、実は私が歩いているのではないかくあるべき因縁によって歩かせて頂いているのだと気付かされ、更には仏様に背負うて頂いているという他力を味い得た時、この世の苦しみを脱して本願力に生かされる喜びの世界に入るのであります、身も心もかるがると目的地に

到れるのを譬えたのでありましょう。この仏凡一如の境地、人が仏様を負うたのか仏様が人を負わせたのか判らない。私が歩いているのか仏様が歩いているのか分かつ事の出来ないのが他力回向の境地でございます。そこにはも早、閻浮檀金の金仏様も牛頭梅檀の木彫の仏像もなく生き生きと私に働きかけ、力強く私を導かれる生身のみ仏様が見出されるのであります。それこそが済んであり往生であると云えましょう。

いだかれてありとも知らずいたづらに

われ反抗す大いなるみ手に（九条武子女史）

私共はいつでもどこでもみ仏様の大慈悲の御手にいだかれて居りますのに自分の力を過信して小賢しい計らいの心におどらされ、思惑通り行かないと云っては悩んだり苦しんだりして居ります、その愚かさははっきりと見つめ懺悔しそれ故にみ仏にすがらねばいられないひたすらな心をうたわれたものであります。然もいだかれてありともしらず反抗している「我」というものに気付いた時が即ち救いであり、更にはそのような「我」に気付かせて頂いたこと自体私が気付いたのでは

なく、み仏の大慈悲のおはからいによるのでございます。

人間の浅はかな智恵才覚では到底生死の大問題を解決する事は出来ません。又どれ程科学進んだとしても科学のみで人間の永遠性や本当の幸福が保証されるとは申せません。例えば先頃国際文化会館知的交流委員会の招きによって来日せられた米国の物理学者オッペンハイマー氏の如きは且つて世界最初の原爆をつくらせるのに成功した人ですが、それについて科学者達は深い罪惡をおかしたと反省し、昨年西ベルリンで行われた文化自由会議の席上では「原子武装をいかに支配し抑制するかは政治家の惡夢になっている。次の大戰がおこれば死者を埋葬する為に生き残るものさえいなくなるだろう」とまで案じ、科学者の責任の意義を信じてはいられませんが「科学や科学者だけでは平和の家を支える一本の柱にすぎません」と言つて人間以上の大きな力、宗教的な裏付を求めて居られるようでありました。このような緊迫感の中で我々仏教徒は眞の平和建立の爲世界の隅を照らす光明にならねばならないと思います。

それにはあらゆる我意我慾我執をすて去り、すべての国の人々と手をつなぎあい拝み合う仏陀の精神を我々一人々々がまづ実践することが大切でございます。そしてその実践の方法として私共浄土教徒にはすでにお念仏が選択せられてあります。人間の無力をかなしみ信機信法を確立する事によつてただ阿弥陀仏に皈命するという南無阿弥陀仏の世界、南無阿弥陀仏と称せずにはいられない願行具足の念仏生活が體驗せられ、私が称名するのではなく、私という我執をすて去り放下した所に阿弥陀仏によつて称えさせて頂く南無阿弥陀仏の三昧境が展開されるのであります。「願」とは云うまでもなく我々凡夫の往生への願いと、一切衆生を済わすにはおかないみ仏の御本願大誓願をさし、「行」とはその実践であります。人間の苦惱とみ仏の慈悲とのふれ合いの極地に必然的になされるのが念仏であります。それは祈りであり救いであり、無量無辺の阿弥陀仏、永遠なる真理そのものと申せましょう。

崩れゆくものの



戸川 靈 俊

ように出ばっている、という意味で、この地名が生れたと伝えられる岡崎。このあたりは、今、平安神宮や美術館、動物園、図書館、京都会館等の立つ同名の公園を中心とする京都の文化地域であるが、平安末期、法然上人の時代にも、これら文化施設の立ち並ぶその地上には、歴朝建立の六つの大寺が、平安の仏教文化の絢爛の美をきそつていたのである。

浄土教に回心ののち、比叡を下られた法然上人は、まづ白川郷の栗原ヶ岡をおとづられた。

栗原ヶ岡とは、それと並ぶ神楽ヶ岡とともに

に東山連峯の一枝峯をなして如意ヶ嶽——大

文字の山——の西方のあたりに横にのびた小丘陵のことで、そのすそには源を比叡に発した白川の清冽なせせらぎが南へと流れている。

もとから比叡黒谷の所領であったのを、そ

の師叡空上人から、はなむけに法然上人に贈られるのである。

後にこの岡は、法然上人が草庵を営まれた

ゆかりで比叡の黒谷をこれにうつして新黒谷

の名で呼ばれ、いつの頃からか黒谷となり、栗原の名はすっかりうせ去って今に及んだのである。

京洛教化の最初の拠点にもがなと栗原ヶ岡をおとづられた法然上人が、ついで足をむけられたのは、栗原ヶ岡のほとりにそそり立つ堂塔伽藍の寺々であつたろうことが想像される。

栗原ヶ岡のほとりとは、現今、岡崎の地名でよばれるところ。

岡崎——栗原ヶ岡と神岡ヶ岡とがみ、さ、きの

六つの大寺——六勝寺——とは白河院建立の法勝寺、堀河院の尊勝寺、鳥羽院の最勝寺、崇徳院の成勝寺、近衛院の延勝寺、鳥羽の皇后待賢門院の円勝寺を云う。ほかに藤原氏建立の善勝寺も挙げられよう。

これらの寺々の堂塔伽藍か、どのように壮麗なものであつたかを、例えば法勝寺の面影についてさぐってみると、金色三丈二尺の大毘盧舎那仏、二丈の胎藏四仏、彩色九尺の梵天帝釈、八尺の四天王を安置の金堂、金色二丈の釈迦仏、丈六の普賢文殊奉置の講堂、金色丈六の阿弥陀仏九体、一丈の観音勢至、彩色

六尺の四天王を祀る阿弥陀堂、金色丈六の薬師仏七体の薬師堂、彩色二丈六尺の不動尊、丈六の四大明王の五大堂、七宝塔の法華堂、白檀三尺の愛染明王の円堂、そして金色等身の阿弥陀仏と三尺の脇士四菩薩の八角九重塔が岡崎の天空に摩してそびえ立っていた。寺域は四丁四面あったという。

六人、また供花を手にして舞い、衆人衆僧三百の大道が行われて、文字通り、經典に描く極楽浄土そのままの姿と行事がもたれたのである。

しかしながら、厭離穢土欣求浄土の、このゆがめれた仏教信仰が——眼には華麗な耳には絶妙な、はかなく感覚をくすぐりまひさせるにほかならない官能的儉安の信仰が、はたして世紀末の様相を帯びた平安末期の上下の人々の魂の真の救いとなったであろうか。

浄妙寺関白は

きみが代に法のすぐるるしるしかな

ひかりさしそう西の月かげ

と讃歌を奉じてはいるけれども。

深い慟哭が耳にできるようである。
それらの寺々では、平安末期の末法思想の影響で懺悔滅罪と往生極楽の悲願をこめて、つねに華麗な仏事法会が行われた。

極楽の八功德水になぞらえた池には竜頭げき首の船がもやい、池畔の東西の廻廊には終日散華の行道があり、金堂前の舞台には金鼓が打たれ音楽が奏でられ、楽天菩薩は四種の色花を散じ、伽陵頻八人、胡蝶八人、菩薩十

であろう。

或いは白河院離宮のあとの法勝寺の、数度の雷火にくずれ落ちた八角九重塔の基壇にたずんで、これを哀しむよりも、形骸にたよるものの虚しさに深く思いをこめられたことでもあろう。

造寺堅固とは、仏教の、しかもわが法然上人の浄土教がよって立つところの歴史観である。これは仏法は滅び去って、ただ形骸だけの造寺造塔のみが専ら行われるということと同時に仏寺大伽藍の建造に象徴されるような時代の文明の爛熟とその頹廃とを意味する。

宮廷の残燭のような權威と、夥しい財と人力を苦使して営まれた法勝寺ほかの寺々の大伽藍、そしてそこに修せられるショー的な仏事法会は、まさしく平安末期の仏法の、同時に文化の世紀末的破滅の様相——造寺堅固を物語るものであろう。

六勝寺の寺々のほとりに立たれた時、法然上人は、造寺造塔の虚しさと、精神的なるものの勝利を確く信じられたことであらう。そ

して堂塔伽藍の形式的なるものを超えた念仏信仰への不惜身命を誓われたことであろう。

わたくしは、ときに自分の住む岡崎のあたりをそぞろ歩く毎に、今はわずかに町名にのみ残る造寺堅固の六勝寺の寺々のはかなさと、八百年の歴史を貫ぬいて今に生きる念仏の教えのつよさに思いをよせるのである。

造寺造塔への批判は、法蓮房に示された法然上人の次の御法語に十分汲みとることができよう。

遺跡は一廟を占むれば遺法あまねからず。
予が遺跡は諸州にあるべし。その故は念仏三昧の興行は愚老一期の勸化なり。賤男賤女の柴の戸細、海人漁人の葦の苦屋にいたるまで、念仏を修せんみぎりは、みなこれ我が遺跡なるべし……

ところで、現代はまた平安末期法然上人の時代にも増して、末法の様相深刻なものがみられよう。造寺堅固のその名称にふさわしく既成教団も、それを批判するという新しい宗団も、すべて大伽藍主義と大殿堂主義とに、

信者大衆の零細な生活とは極度にかけはなれてゆく。

宗教の面のみではない。政治にも経済にも教育にも、社会のあらゆる面に、デラックスと称し、マンモスとうたわれて雲表をめざす大建築主義がとられている。これこそ、正しく現代の末法の造寺堅固を意味するものではないだろうか。

現代の造寺堅固——大建築主義に象徴され

(童)(心)(仏)(心)

バトンタッチ

鼠がふらふらになって、牛小屋に來ました。

「ああ。つかれた。つかれた。」

牛は目だけ動かして、鼠を見ました。

「いったい、どうしたんです。」

「もう駄目だよ。僕は本当につまらない動物だよ。誰もいないと元氣が出て、いたずらをするけれど、コトツという音でもしたら、あわてて穴に逃げ込むんだ。そして、じっと様子を見て、また誰もいないとあばれるんだ。」

頽廢の文化、俗世的文化に対して浄土教はどのように批判し、どのように対決すべきであらうか。

この時にこそ、六勝寺の寺々に象徴されるその世紀末的仏教文化を徹底的に批判し対決された法然上人の教えに心こめて聴き、時代の文化の批判と対決に怯懦であってはならないと思うのである。(黒谷にて)

(大阪市立大学教授)

「なるほど。それで。」

「だから、神経がつかれて、休まる時がない。もっと、氣を大きく持っていていられたらいいと思んうだけど。そこへいくと、牛さんはいいよ。体も大きいけれど、こせこせしないもの。」

「ああは。私はゆっくり、あわてずに、ただこつこつと歩くだけさ。君のように頭の働きがはやくないもの。」

「それでいいんだよ。このへんで、君にバトン渡すから、今年いっぱい当番をやつてよ。」

鼠にいわれて、牛はのっそりと小屋から出るとゆっくり歩きはじめました。力強い足取りで。

(桐)

新編 百 喻 經 (10)

三一 必要は必要

先日、私の家の近くの家が、電気の事故で、危く火事を起す所だった。

呼びに来たので、すぐ飛んでいって、調べてやったら、安全器の所のヒューズが、銅線でつないである。そして主人曰く

「ヒューズが飛んで、仕様が無いから、飛ばないように、丈夫なのを……」

と、いやはや、必要なものの、必要性を知らぬ者には……

三二 人を呪わば

昔、一人の法師が、山の中を通りかかり一人の旅人と、道連れになったが、此の法師は、山中で人目の無いのを見て、此の旅人を殺し、持ち物を奪い取り、現場を立去り、ある村に来て、一軒の家にて、一夜の宿を頼んで、泊めてもらった。

所が、此の家の主婦が見ると、自分の夫

の着物を着け、持物を持っているので、近所の人々に相談して、調べると、此の僧が夫を殺した事が判り、法師の語った現場に行くと、無惨な夫の死体があった。村人達は怒って、この法師を、射殺してしまった。

三三 皆勤無情

ある中学生の女子だが、その子は、小学校の時から、中学三年の三学期まで、一日の欠席も無く、毎年皆勤賞を貰っていた。

その子供も、両親も、これが自慢の一つだった。所が不幸にも、三学期の三月に、感冒に犯された。医者は安静を宣告した。

所がその頃学校では、もし此の子が、本学年も、無欠席だったら、小学校以来の、無欠席者として、特別に表彰する事が、相談されて、両親にも、その事が知らされていた。しかるに此の不幸だ、残念に思った親たちは、子供を激励して、学校へ、無理に通わせた。その結果病疾悪化、遂に卒業式を待たずに死んだ。

三四 割引定価

ある店で「年末につき、商品を正札より二割引」として宣伝した。

その日になると、或る定められた商品は定価の二割引で販売して、大成功をした。所がこれには、裡があつて、数日前から準備して、定価を五割増にしてつけておいたのだ。だから平素より、三割高く売った事になるのだが、お客は、安いと思つたのだ。はてさて要領のいいのにはかなわない、名を与えて実をとる、徳川の政策の如し。

三五 電球のみの電灯

電灯を知らない男が、都会に出て来て、その便利な、そして明るいのに驚いて、電球を買って、田舎へみやげに、持って帰ったが、電気の通っていない此の地方で、是が役に立たなかった事は、勿論であった。是は明治時代の笑話したが、結果の、花々しさのみ知って、その原因を考えぬと、此の失敗がある。

(伊東拳位)

牛異三題

牧尾良海



「どうでしょう、黄金百両で私に譲つて下さらぬか？」

と頼むのである。

「とんでもないことです。たとえ黄金壹万両をお積み下さってもお売りすることはできません。之は私共の宝物なんですから。」

と、狄方がけんもほろほろにことわると、その旅人は口惜しそうな様子で、

「この絵は江南の李家の宝蔵にあったものなんです。李家が亡びた時に行方不明になつたもので、李家の後裔のお方から頼まれて、私が永年探していたものです。今、貴方が譲ることを拒まれても、やがてはきつと之を失うことになるでしょう。」

と言ひ残して去って行つた。それからというもの、狄方はこの絵を箱にしまつて錠を固くかけ、出し入れには一切立ち合うようにして、よくよく親しい間柄の者でなければ全然

見せようとしなかった。ところが、長年会わなかつた錢淳という友人が、一日、親しげに彼を尋ねて来た。招じ入れてから暫らくすると、

「君は凄いい絵を持っているというじゃない

1

西洛に狄方^{てきほう}という人があつた。骨董品を蒐めるのが道楽で、その中に牛の絵を一軸持っていたが、いつ頃の作品なのか、来歴もさだかでなかつた。その絵は、一人の少年が一匹の牛に草を喰わせていて、その傍に草庵を描いたもので、狄方は格別に珍らしいものとも思つていなかった。

或る日のこと、この一幅を壁にかけておいたが、夜になってたまたま燭台をとつて之を見ると、牧童が草庵の中で寝ている図柄になつていたので大層驚いた。翌日之を見ると、その少年は又牛の傍に立っているのである。

夜になつてから見ると、又草庵の中で寝ているのである。狄方は、それからというものの、この一軸を宝物として大事に仕舞いこんでいた。有名な画家が立ち寄つた時に、この絵を持ち出して見てもらうと、

「この絵こそ正に神品である。これ程のもの、は又とあるまい。」

という鑑定であつた。

或る時のことである。一人の旅人が狄方に面会を求めて、

「お宅に珍らしい絵があると聞いて参つたのだが、見せていただけるでしょうか？」

と訊ねるので、取り出して来て見せると、

か。私はこれでもその方面にかけては相当な目ききなんだよ。」

というので、狄方はその絵をとり出して来て見せることにした。錢淳はその絵をつくづくと視ていたが、あつと言う間もなくその軸を懷に突つこむと、黄金十枚ほどを地上に投げ出して、

「僕は李家主人の為に絵を取りに来たのだ。お金を払うのは格別の思し召しだよ。」

と言うなり、門から走り出て、やがて見えなくなつてしまった。狄方は地団太踏んでくやしがつたがあとの祭りで、それがもとで暫くは病氣になったほどであった。後日詳しく聞きあわせてみると、錢淳はもう何年も前に死んだということ、言うなればあの世から李唐主に頼まれて、鬼が絵を取り返しに来た訳である。(青瑣高義後集)

2

昔、陳貴という者があり、牛を屠殺することを仕事としていた。何十何百の牛を屠ったか、数え切れぬほどであった。或る日、病にかかり、数日後には発狂して田野の間を走り回って苗禾を喰うという有様で、家人がやつ

と捉えて帰つたが、それから後はただ草を喰うのみで、一月余り経つと死んでしまった。死ぬまえ数日間には牛そつくりの聲で咆吼し、死んでから尻尾が生えたということである。一年ほど経つたのち、隣家の張生の所の牛が仔牛を生んだが、腹の下に白い毛が微かに生えていて、陳貴という字に読めるので、皆が今更に業縁の恐ろしさを歎じた次第であった。陳貴の妻女は、お金を出してこの仔牛を買い求めようと思つたが、その夜、夢の中で役人の姿をした者が現われて、

「この仔牛こそは、鞭うたるる苦しみ、刃でひき裂かるる苦しみを受けるために生れたものじゃ。お前は何とて神明の御意にさからつてこの仔牛を買わんとするのじゃ？まづ、お前こそ先に殺してくれようぞ。」と告げたので、懼れおののいて買うのをやめたということである。(青瑣高義後集)

3

雀君という人があつた。唐の貞元の頃に河内の郡守になつたが、慾が深くその上酷薄で河内の人々が難儀なことだとうらめしく思つていた。この郡守は、いつもその仏寺の中

の仏像の金具を掠めとつて、何貫というほど貯めこんだらしいが、そのつくないをするような気配はつゆほどもなかった。僧侶たちも相手が何しろ太守であるから、文句も言えずに黙っているより仕様がなかった。

ところが、そのうち間もなく雀君は郡の役所で俄かに死んでしまった。不思議なことにその同じ日に、寺の牛がお産をして一匹の仔牛が生れた。その仔牛のひたいの所に白い毛が生えており、正しく雀某と読みとれるのであつた。寺の僧たちは皆それを見て、

「雀君はいつもこの寺の仏像の金具を掠めておられて、ついにお返しにならなかつたが今日、こんな牛が生れたということは、どう考えたらよいものじやろう？」

と嘆じていた。雀君の家人はこの事を聞き伝えて、ほかの牛を献じて交換してもらふことにした。寺へやつて来て、牛のひたいの毛を削り落させたがじきに又生えて来る始末であつた。家へ曳いて帰り、おりに入れて飼料をやつても、少しも喰べようとしないので、このままでは仕方がないので、又、お寺へ返したということである。(宜室志)

弥陀信仰の二つの世界



鹿 島 成 唯

この数年来「二つの世界」ということが、一種の流行語になっているが、この言葉本来の政治的な意味は別として、弥陀信仰にも遠く過去の時代には二つの世界があった。弥陀信仰は、すでに、奈良時代には日本に伝えられていたが、広く信仰されるようになったのは平安時代になってからである。平安時代の社会では、貴族階級と一般民衆との差別が明確であった。今日のように中流階級は存在せず、貧富の差ははげしかった。同一の信仰でもそれが受け入れられた社会の環境や思想的

な背景によって異なる形に発達してゆくということは、宗教の歴史の上ではよくみられることである。弥陀信仰も貴族と民衆の社会とでは、場の相違によって多少異なる形に発達した。

(一) 美しい法会

源氏物語や枕草子、あるいは栄華物語など平安時代の著名な文芸作品の中には、阿弥陀仏を讃歎した文章や、極楽浄土のありさまを美しく描写した文章がしばしば出てくる。こ

うした文芸作品を通して当時の貴族社会の弥陀信仰のありかたを知ることができる。

栄華物語には藤原道長が弥陀信仰に深い関心を示していたことが記されている。自から栄華を誇った道長も、平素から極楽往生を願い、念仏の行者であった。なお、それだけでは満足せずに、自から四方に金銀をちりばめた立派な法成寺の阿弥陀堂を建立した。そして、臨終にはこの阿弥陀堂で、阿弥陀仏の手より糸を引き、自分の手にかけて、その導きによって極楽往生を信じつつ息を引き取った

といわれている。平安中期以後、道長を中心
に貴族等の間では弥陀信仰が著しく普及し、
その結果、阿弥陀堂が各所に建立されるよう
になった。中でも、道長の子頼通の建てた宇
治平等院の阿弥陀堂(鳳凰堂)は著名である。
そして、当時の人々は優雅な阿弥陀堂の中
静かに坐して、心に極楽浄土のありさまを思
いうかべ、冥想にふけていたのである。

また、盛大な法会も盛んに行われた。栄華
物語や法成寺金堂供養記には法成寺の大法会
の華々しい様子が述べられている。

治安二年七月十四日に行われたこの法会に
は天皇の行幸があり、太皇太后、皇太后、
中宮、尚侍等相ついて入堂され、御伴の女
房達の美しい衣服が几帳を通して見えると
いうし、綾羅をまとった僧達のきらびやか
さ、池には竜頭鷄首の船が浮び、そこから
音楽が奏でられ、舞台では菩薩の舞が舞わ
れている。そこに高雅な香煙がただよい、
空からは蓮瓣が散ってくる。

というような、まことにこの世ながらの浄土
のすがたで、こうした法会を見ると、人々
はただ「まことの極楽ぞ思ひやられし」と讃

歎するばかりであった。美しい法会は貴族社
会の一つの習慣のようなものにさえなった。
弥陀信仰は、彼等の日常生活の中にまでとけ
こみ、生活態度や、さらには人生観まで変え
るに至った。阿弥陀堂の静かな雰囲気とい
い、浄土をこの世に写し出したような法会と
いい、そこには、やはり平安貴族らしい優雅
な世界を展開した。

ところで、ある一つの新しい思想や信仰
が時代全体の常識となると、次には形式化し
てゆくという傾向があるが、弥陀信仰の場合
もそうした現象を生じてきた。浄土教本来の
考えかたは、自己の罪障を認め、罪苦から逃
れるために浄土を欣求するというところにそ
の出发点があるが、貴族等が阿弥陀堂を作
り、盛大な法会を営んだのは、浄土教の美的
な面に興趣を感じたり、法会のすばらしい外
観や、お祭気分的なところに憧れたり、さら
には一種の遊樂や感傷とさえ考えていたとこ
ろも少なくなかったようである。

清少納言の枕草子には、説教の講師はかお
形のよい方がとくにありがたいように感ずる
といわれているのは有名なことである。事実

法会の際には、十才代の稚子や二十才代・三
十才代の若い眉目秀麗な僧達が選ばれていた
ようである。「うつくしい法会」もはなはだ
しいときには、正面に安置した本尊のほとけ
さまさえ「いみじくなまめかしく見えさせ給
ふ。」(栄華物語)というほどまでになってし
まった。したがって、声の美しい人々に経な
どを読ませ、夜一夜を遊び過すというような
ことが、全く趣味的に行われ、あたかも、今
日の音楽会などと同じ程度に気軽く楽しく行
われていたようである。

また、この信仰が歓迎された裏には、この
世で極めた栄華を来世でもなお続けたいとい
う二世安樂的な欲望もあった。元来、源氏物語
や栄華物語などの貴族の生活をえがいた文芸
作品には、極楽への憧れを表わした言葉は多
いが、反対に地獄に対する恐怖を表わした言
葉はほとんど見られないということがいわれ
ている。それは結局、厭離穢土欣求浄土を説
く弥陀信仰の欣求浄土の一面のみが強調され
ていたということを示しているであろう。
しかしながら、そうした中には、また、そ
れなりの価値もあったのである。宗教には、

雲開気というものも重要な要素であって、壮嚴な法会から敬虔な信仰が生ずる可能性は多いのである。また、阿弥陀堂の中に坐して、世俗的な煩らわしさから離れて、浄土の観想にふけるという禪定的な要素には弥陀信仰の知的な面があったのである。

(二) 地獄の恐怖

説話文学として名高い今昔物語は、印度・中国・日本の三国に古くから伝わっていた民間伝説を、平安時代の末にまとめて出来た書物であり、ここには、貴族社会とは別の一般民衆の間における仏教信仰の実例が数多く見られる。その中に次のような話がある。

昔し、ある一人の心のやさしい、美しい女性がいた。彼女は不幸にも年若で病死してしまった。前世の因縁で地獄に落ち、裁きを受けるために閻魔大王の前にいった。庭の中を見わたすと、おりしも多ぜいの罪人が縛られて罪の軽重を問われている。罪人の泣き叫ぶ声があたり一面に響いていた。たまたまそこに左手に錯杖右手に一巻の書を持った地藏菩薩がやってきて、その女性

に向って「自分は三途の苦難を救う地藏菩薩である。今お前の顔を見ると生前すでに大きな善業を積んだ人だということがわかる。だからお前を救ってやろう。」といって、女性を閻魔の前に引きつれて行き、「この女性は、今度召されて大王の前に参りましたが、もともと行の正しい人でございます。二再び世の中にかえして、さらに善根を修めさせようと思ひますがいかがなものでしょう。」とたずねた。そして、大王の許可がおりると、女性を閻魔王宮の門外につれ出して、「お前が極楽往生するため大切なことは、自分の身にそなわる心一つが正しくあることだ。」ということをお教えた。この言葉を聞き終ると女性は二再び生きかえった。その後、この女性は出家して、よく地藏菩薩の言葉を守り、年八十を迎えて、口に念仏を唱え心に地藏を念じながら入滅した。

このように、人が何らかの事情で地獄に落ち、閻魔王宮に召され、その裁きを受けているうちにまた何らかの事情で地藏菩薩に救われて、この世に蘇生するという蘇生譚が今昔

物語には数多く見られる。一見たわいもない話であるが、この物語を通して民衆の弥陀信仰のありかたを考えてみよう。

まず、地獄の話についてであるが、先の源氏物語や榮華物語など貴族の生活をえがいた作品では、阿弥陀仏や浄土に関する記述は多くあったが、地獄のことにはほとんど言及していなかった。しかしそれとは対比的に民衆説話の中には、このように地獄の相をえがいた物語が数多く出てくる。そこにはやはり浄土教思想の受け取りかたの相違が感じられる。貴族等は財力にたのんで立派な阿弥陀堂を建てたり盛大な法会を行ったりすることによって、日ごろ善根を積んでいると自負していた。したがって、地獄へ落ちるという恐怖感におびやかされることもなく、地獄のことにあまり関心を持つ必要もなかった。地獄よりもむしろ浄土を自分等の身邊にあるものと考えていたようである。ところが阿弥陀堂を作り盛大な法会を行う能力のない人々の間では、自分等は色々な罪を重ね何ら極楽へ生れるための善根を修していない、死後は必ず地獄へ落ちなければならない、という恐怖感

から地獄への関心がたかまってきた、地獄を身近なものと考えようになつたのである。

地獄の説話が多いということは、罪障の意識と地獄への恐怖感を反影しているのではないだろうか。

また、この物語の中に、地藏菩薩が地獄へ落ちた人間を救つて極楽への道案内をする話があつた。本来、地藏菩薩は直接浄土教とは関係のない菩薩であつたが、弥陀信仰の流布にともなつて、地獄極楽の往来の中にまで登場してくるようになった。今昔物語には、

「弥陀の名号を唱え、地藏菩薩を念じ」というごとく、一方では墮地獄の苦しみから救つてくれる地藏菩薩を信仰し、他方では往生極楽を約束してくれる阿弥陀仏に帰依するといふ話が出てくるが、これは当時阿弥陀仏と地藏菩薩と一緒になつた經典には説かれていない複合信仰が広く行われていたことを物語るものである。このような複合信仰が発達した理由は、貴族の信仰の中に形成された阿弥陀仏の影像があまりにも知性的であり、あまりにも美的になりすぎたため、慈悲の面が弱められ、罪の意識に苦しむ人々にとっては、阿

弥陀仏が遠い存在のように考えられていたためではなからうか。そうした時に地獄に対する恐怖感が徹底してきた結果、地藏菩薩が地獄の苦しみから救つてくれる救済者とし信仰されるようになったのである。結局、当時の浄土教思想が、また、阿弥陀仏はあらゆる種類の人間を対象とする救済者である、と考えるまでに円熟していなかつたのである。

このように阿弥陀仏と地藏菩薩と混合するのは純粹の弥陀信仰ではない。しかしながら、ここには、罪障の意識・地獄への恐怖感が「助けたまえ」という言葉となり、いかなる悪人といえども、もし地藏の宝号を念じ、弥陀の名号を称え、ひたすらそれに帰依するならば、地獄の苦から救われて浄土に生れることができるという絶体帰依の信仰が見られる。この絶体帰依の信念には、法然上人や親鸞上人の説かれた弥陀の名号を称えるだけで、もしくは帰依するだけで往生できるといふ教えに通ずる点もあるのである。

ここで、今迄に述べたことを要約すると、貴族の世界の弥陀信仰では、絶体帰依の信念には欠けていたが、浄土教のもつ美的な面が

強調されて、浄土教美術を生み、壮麗な法会もあつた。また観想の中には知的な要素もあつた。一方、民衆の間では、複合信仰が流行し、ややもすると狂信的になる傾向もあつて知的な要素には欠けていたが、絶体帰依の信仰は芽生えていた、ということを描いたのである。

この両者は、いずれをとつてもある一面ではすぐれた点をもっているが、全体としては未完成のものであつた。やがて、鎌倉時代になつて法然上人が現われて、弥陀信仰は一宗の教義として完成された。そこで初めてこの信仰は帰依の心と、行と、智慧とを兼ねそなえた信仰となり、弥陀仏は、慈悲と智慧とをそなえた仏であることが、あらためて認識された。しかし、この信仰が完成するまでに、すでに、日本の上流社会も民衆社会をも経てきたということには注目すべきである。また逆に考えて、法然上人の教えが貧富の別なく貴ばれるようになったのは。上人がこうした二つの社会を経た弥陀信仰の各々の長所をとり入れて初めて総合的なものに完成したからであるともいえる。

大師御生活の管見

法然上人と藏俊僧都

村 上 博 了

一

大師上人は黒谷の報恩蔵にあって、一切經を數遍読破研究せられた結果、洛西嵯峨清凉寺に赴いたのである、時や春、上人二十四才であつた。

織りなり春の詩情は特によい。松林につつまれた嵯峨清凉寺は寂靜の内にあつた。當時清凉寺は真言宗に属していた、上人は手続をすまして釈迦堂に参籠した。勅修御伝には、

その頃法勝寺阿弥陀堂、白河御堂、尊勝寺阿弥陀堂、鳥羽成菩提院等で念仏会は盛んに行われていた。上人は黒谷の慈眼房寂空上人の許にあって、念仏が世間で申されていたことを知らぬ筈はない、一切經の研究がすすむにつれて、当時の念仏の持つ意味に疑問が出来たものであろう。誰にとすべきか。寂空上人は叡山の法將である。すでに七難消滅の念仏は教えられている、特に教えを請うまでもない。

清凉寺の参籠七日満じければ、それより南都へくだり、法相宗の碩学藏俊僧都の房にいたりて云云

しにぬるむに従つて洛西嵯峨へと足は向つたのである。叡山をあとにして京の町並は美しい、鴨河岸の柳の芽は緑りをまして美しい、洛西には入ると竹と桃花の織りなり春の詩情は特によい。松林につつまれた嵯峨清凉寺は寂靜の内にあつた。當時清凉寺は真言宗に属していた、上人は手続をすまして釈迦堂に参籠した。勅修御伝には、

尊に直結する意味に於て有難い有意義のことである。

七日の参籠は無駄ではなかつた。それは実行を伴う行法である。仏教は研究の爲の研究ではない。実行へ第一歩を移したことは、それだけ求法者の進歩である。まして生身の釈尊像を前にして、七日間の日時は上人の心中に香り咲きそめた。なにものかがあつたらしい。なぜならば、上人は華嚴三論、地論、摂論、俱舍、唯識、成実等各宗のある南都に行き、天台真言につぐ大宗派である法相宗の碩学藏俊僧都を奈良興福寺に訪うたからである。

二

その時の様子について御伝に、上人修行者のさまにて、対面し申さんと申されたりけり。大床におはしける僧都いかがおもはれけん、あかり障子をあげて、うちへ請じいれたてまつりて対面し、法談ときをうつされけり。

とある。七日と日限したところに、上人の心の在り方を見る。清凉寺本尊赤せんだんの釈迦如来像は、印度に於て、釈尊在世中にその生身を写して造られた五臓六腑を持つ靈像である。その宝前に七日間参籠して、念仏の本意いづくにありや、凡夫往生の法やいかにと祈誓せられたことは、上人の求道上の苦悩を語るものであると同時に、釈

と伝えている。一般の求法者のように「御免下さい」と訪づれたのである。国宝知恩院御伝には、書院を見せ、ぬれ縁に上人座り、童子が明り障子を明けて取り次ぎに出

ている。障子の中には、法衣をつけた僧都が念珠を手に耳をすませて座っている。右手隅に庭を見せ花木と植木を現している。宗宝増上寺三幅御伝には六十図中の(一)として僧都と上人とは対談、僧都の後に童子、上の後斜めにしきいの上に一僧を見せ、庭に馬一匹、振分けの荷を見せている。

僧都は取次を待たないで、どう思われたか明り障子をあげ「こちらえ」と請じ入れて、法談に時をうつされたのである。

僧都は公卿出身であり、菩提山興善院開山しかも僧都と云う大変身分の高いお方であつて、一介の修行者などが軽々と訪うたとても、たやすく面会出来る人ではなかった。それを「いかが思われけん」とあるように、取次の返事も待たないで、自身で声をかけられたと云うことは、かようなことを仏縁と云うものであらう。法談については、上人の高弟である聖覚作と云われる十六門記（黒谷源空上人伝）に、

上人自義を述給に、藏俊始には、貴房の義勢、細々に聞へ難しと、高声に談じけるが、後には舌を巻て信伏し云云

と記している。上人歿後間もなく出来た十

六門記の説である、事実を伝えたものであらう。細々に聞え難しとあるは、低声で聞きとり難いと云う意味であらう。上人は静かな声で充分礼を尽しての態度であつた。後には舌をまいて信伏しと、黙してきき入つたのである。そうして「貴房はただ人にあらず、おそらくは大權の化現か、昔の論主にあひたてまつるとも、これにはすぐべからずと、おぼゆるほどなり。智慧深遠なること、言語道断なり」とほめたたえている。九卷伝には

法相宗の法門の自解の義を述るに藏俊是を聞て、手を打て云、我が師資相承せるいまだ此義を存せず。上人は只人にあらず。仏陀の境界なり云云

と記されている。大變な感激であつた。私共は僧都の「す直さ」「いかに僧侶らしき明るさ」を見る。殊に上人の独学の推義を充分理解され「我が師資相承にもこの義がない」とし、御説こそ仏陀の境界とすること僧都も亦只人でない法器と弘い度量の人柄であつたことを見る。

三

僧都の感激は決して、おさなりのもので

なかつたことは、

一期のあひだ、毎年供養を、のぶること、をこたひなかりける云云と伝えられるからである。

供養すると云うことは口に出して云うことは易いけれども容易のわざではない。

その厚意を勿体ない、有難いことだと、上人はうけられて、一層の研学へとすすまれたのである。上人は九才時父を亡いついで母を失い、勉学生活の資をいづくより求むべきか、筆墨をいかにしたろうか、生き研究する上に於て、僧都の配意は、上人を無言の内に奮起せしめずにはおかなかつた。

僧都は当時の高官である。而も當時に天台真言兩宗につぐ大宗派法相宗の指導者であつた。一介の野人である平民僧、烏帽子もない法然上人を、それほどまでに尊敬したと云うことは、上人を仏陀の境界、仏さまと仰いだからであらう。上人二十四才時に於てさえ、かかる法器であつたのである。以上によつて、法然上人と弟子をも支えた経済上の後援者の一人が判る。

× × ×



近代高僧伝

山崎 弁 栄

はるか西の彼方に富士の雄姿をのぞみ、利根川をへだてて北に筑波の連山を望見する手賀沼の南岸、ゆるやかに起伏する岡のたもと鷺の谷に、山崎嘉平の長男として啓之助が生まれたのは安政六年二月二十日のことであつた。長男として生れた彼はゆくゆくは一家をささえていかなければならぬ運命をになつて、沼ぞいにある三町有余の田畑の耕作に、もって生れた頑健な体軀を駆使して精一杯に働き、米つきもすれば草刈りもし、沼の藻と

いう精進ぶり、夜は夜で昼間のつかれもいとわず、カンテラをたよりに読み書きにいそしむという有様、野良に出かける時でも、馬を引いて商いにでる時にも何時でもふところに書物をしのばせ、人が骨休みしている間とか、昼餉のあとには必らず本を片手に目を通したという程の書物の虫であつた。村の人がその精進ぶりに驚くのも無理からぬことである。そして読んだ書物の多くは、隣の善竜寺か檀那寺の医王寺から借りだした仏典か、高僧名僧の逸話や伝記であつた。

しかし伝記や仏典の上から仏者の生活を学び、仏法に思いをはせているだけでは到底宗教的情感を満たすことは出来ない。このような心のやるせなさには、遂に父の心を動かし、医王寺の山崎徳恵を拜して出家することになり、得度して名を弁栄と改めた。明治十二年十一月のことである。時に父から「どうせ出家するとならば、本当の出家者となれ」と誠しめられた言葉は耳底に残って一日として忘れることもなく、小金東漸寺の静譽大康はこの非凡な子を、翌日もらいうけて自分の弟子とすることとなった。それからというものの弁栄は雑用の忙しさの中にも、農家の子として育てられたたくましい体軀にもいわせて、寸暇をさいては大蔵経をひもどき、朝は四時に起床し深夜にいたるまで、雑事のほかは念仏と読書のあけくれであつた。「弁栄は寝ないのだらうか」と噂されたほどの精進ぶりであつた。同十四年には師のすすめもあつて江戸に出、大谷良胤や山実弁（かやま）というような諸宗きつての当代の碩学について学んだけれども、未だ学解によつてのみ満たし得ないもののあるを察した彼は、在京僅か一カ年ばかりで遊学にピリオドをうち、「活きた本尊様を

心のなかにおむかえしたい」という念願にもえ、帰国するや直ちに生家にも立ちよらず医王寺に入り、旅装をとくまもどかしく境内の薬師堂にこもって二十一日間の断食称名の修行にはげむことになった。腕にローソクを立て線香をよこたえ、掌には燈心をともし、夜ともなれば裏の開山堂の前に立って、日の出まで絶間なく念仏しつづけるという程の苦修練行をつみ、其の後筑波山に入って二カ月の間念仏三昧を修したこともあり、又師大康の訃音を耳にし帰国するや、東漸寺で不臥一百日の報恩別時念仏をしたこともあった。

こえて明治二十四年には五香に善光寺を建立、二十七年には仏跡をさぐらんと船出の旅にのぼり、セイロンに渡り、更にインドに赴いて仏蹟の参拝をなし、終って神戸に上陸帰朝したのは翌年三月の下旬であり、以来有縁にまかせて席のあたたまる間もなく、各地に留錫して念仏の弘通につとめた。

「私は如来さまのみ手に、わたすまでのお使いです」と、念仏をすすめ、直接阿弥陀仏と関係をもつような心的態度をととのえることが伝道であり、これこそ阿弥陀仏をして自分

にあたえられた生命であると深く誓った弁栄は、「如来光明歎徳章」をものし、現代の人たちが誰でも親しめ理解し修することのできる「礼拝儀」の作成にもつとめた。この「礼拝儀」こそは「現在より永遠にまでの大ミオヤ」に対する御礼にして、またおやさまの光明を被りて、永遠の命となる御光」であり、彼の豊かな体験からにじみ出た生き生きとした信仰の告白書であって、改訂に改訂が加えられて現行本がつくられたけれども、それだけにまたすっきりとした日本人として誰でもが親しむことのできる立派な聖典である。彼は阿弥陀仏のことを阿弥陀さまと呼ばないで、「大ミオヤ」とか「おやさま」と呼んでいた。或時弁栄の講義をきかれた僧がこの事に気がつき、不思議に思い「なぜ如来さまのことを、親様何ていうのですか」と問いかけたことがあった。この間に彼はすかさず「ではあなたは如来さまのことを何とお呼びになりますか」と言われ、「阿弥陀さまと呼びます」と申されたところ、「あなたは他人行儀ですね。あなたは自分の父親のことを呼ぶのに、その名前をおびになりますか、それともお父さん

と申されますか。」誰でも両親を呼ぶのに誰々と呼ぶ人はいない。お父さんお母さんと呼ぶ筈である。とすれば私達をお救い導びいて下さる阿弥陀さまを、「大ミオヤさま」「おやさま」と呼ぶのは至極あたりまえのことでは、信仰が本当にその人の生命になっていれば、自然如来さまを自分の心霊の大親様とうけとり、大ミヤ様・親様とお呼びするようになるというのが、彼の心念であった。

かくて一身を捧げて念仏の弘通のためにつとめ、粗衣粗食にあまんじ、徳行衆にすぐれ世人から、「米粒上人」といわれ、米粒に名号や弥陀像をえがいて施与した聖者も、病には抗しがたく大正九年十一月病床の人となり、十二月四日六十二歳の未だこれからという年齢であったにもかかわらず、弥陀慈光のうち大ミオヤの国におかえりになられた。

(大橋 俊雄)

×

×

×

×

仏祖のことば ①

真理は歴史を超えて



宮 林 昭 彦

真理は歴史を超えて存在する。

この理は千古より変らざることがであらう。もし、その時代、国土、環境などによって、変りゆくものであるならば、それは真理ではない。云いかえていうならば、歴史の流れの中に、不断に生きつづけるということは、真理としての価値を有するからにはかならない。

仏教もその例外ではない。もし仏教が紀元前四、五世紀という時代と、インドという国土のみに制約されて、それを超えることができなかったならば歴史の推移とともに消滅してしまったかもしれない。

しかし、仏教が歴史を超えて、さらにそ

の流れのなかに生きつづけることができたということは、それは真理だからである。

さらに云いかえると、永遠に変らざる真理なるものは、また時代の移り変りとともに、たえず融通無礙に時代のうごきのなかに生きつづけるともいい得る。

真理は、涸渇した生命でなくして、泉のごとく滲々と湧きいづる生命を有しているとも云うことができよう。

その汲めども尽きざる真理としての仏教のおしえを、釈尊のことばを通していまいちど、現代という歴史の流れのなかにおいて把握してみたいと思う。

色は無常なり。受・想・行・識は無常なり。一切行は無常なり。一切法は無我なり。涅槃は寂靜なり。(雑阿含經)

仏教の基本的な考え方として、無常ということが云われる。無常とは変化することである。かたちを変えることである。一般にこの無常という言葉は、ものごとの終焉のときにのみ用いられる場合が多い。美しく錦に飾られた樹木の葉も、秋の深まりから冬にかけて一枚二枚と散りおちてやがて枯木となり、さむざむと立つすがたを思いだす。きのうまですこやかであったものが、きょうは死の旅に出るかなしみの人生をむじょうと感ずる。

「祇園精舎の鐘の音、諸行無常の響あり」

まこと、あわれはかなき姿を、むじょうと呼んでいる。しかし、この場合のむじょうは無情であって、無常ではない。もののあわれさを泌々とおもうのは無情をさそうからであらう。

いま、釈尊が語られた無常は、そのよう

な情に棹さして流される無情ではない。生きるすがたにおいてうけとられた積極的態度である。変化し躍動するすがたを無常と云われたのである。

春に下ろされた種が、労働の手と、太陽や雨による天地自然のちからによって、秋に豊かな実りを得るすがたは無常だからである。一才の愛らしい子供が、二才、三才と成長していくすがたにも無常なればこそ可能な現象である。もし、この宇宙人生が無常でなく、常住にして変化せず固定的なものであったならば、いささかの進みも存しないであろう。

病の床にながく身を横たえて療養する人びとも、やがて健康がおとずれることを信ずればこそ、今日の療養のなかにも生きがいを見出すことができるのである。

苦難とたたかいながら、貧しい生活の糧をもとむるときにも、きつと、いまの生活より少しづつでも楽にすることをおもって、きょうの苦勞に堪えるのである。

暗い夜のあとには、かならず明るい朝が訪ずれる。それは、宇宙人生すべてが無常

だからである。進歩し、変化し、成長してやまざるすがたが無常のすがたである。

このように、無常を考えると、決して仏教の説く無常は、陰鬱な厭世的な考え方ではない。積極的な生き方を、そこに求めていくことにほかならない。

無常なるがゆえに無我である。きのうの失敗をいつまでも繰りかえすということは、失敗に固執し、我をはたらかしているすがたである。きのうの失敗の反省は、きのうの成功のちからとならなくてはならない。同じことを繰りかえすことは進歩にはならない。きのうよりきょう、そしてあした、というように、ものごとは進みがなくてはならない。我をはたらかし、いつまでも執着することは、進歩をさまたげることとなる。

無我、それを積極的にいうならば、いま当面している問題と真剣にとりくんで、精いっぱい的情熱をかたむけることである。無我夢中になる、ということがあがるが、あたえられた仕事に対し全霊をうち込んでいくすがたは無我である。無我のきもちを生

活のなかに生かしつづけるととき、人生の大道はたえまなく打ちひらかれてくる。

今日というこの道は、人生において再び通ることがない。すべてを投げ出して今日一日に生きるとき、ゆたかな明日の生活が約束されるのである。

今日を精いっぱい生きたという満足感、えがたき充ちたりた喜びと安らげき心地をあたえるものである。(つづく)

(大正大学講師)

謹賀新年



法然上人讃仰会

「浄土」編集部

国際宗教史会議に出席して



(文学博士 大正大学教授)

佐藤 賢 順

去る九月十一日から十七日まで一週間、ドイツ、マールブルク大学で第十回国際宗教史会議が開かれた。そのあと十八日から二十四日までの更に一週間は、この会議の主催者の計画した見学旅行が行われた。わたしは佐藤密雄、竹中信常両博士その他の日本代表と同行して、この会議に出席した。日本代表は名誉総裁の三笠宮様や現地

で一しょになった人達を加えると二十名に近い多人数で、賑やかであった。その中に「浄土」の同人が三人も加わったということとは、誠に未曾有のことで、世間では目を見張って驚嘆した。

一週間の見学旅行が終って解散したあとは、われわれ三人と早稲田大学の仁戸田六三郎博士と駒沢大学の増永靈鳳博士と一行五人で、ドイツの国内から、スイス・フランス・イギリス・スペイン・南仏・モナコ・イタリー・ギリシャ・エジプト・香港という順序で、一廻りして、国情と宗教事情の調査見学をして、十月二十九日に五十二日ぶりで帰国した。見学した国は十カ国、飛行機には十六回乗った。わたくしとしては初めての大陸旅行であった。便利になった今でも、ヨーロッパを一廻りする（それも文字通り飛び廻る）ということは容易なことではなくて、深夜羽田空港に降り立った姿は、頭髪はボサボサで、不精ひげが生えて、日焼けして、やせこけて、「見る影もなかった」と出迎えの友人達が笑ったほどで、疲れもしばらくは治らなかった。さて話の種は、幾晩続けても話しきれな

いほどあるから、これから少しずつ小出しにお話するが、今日はまず会議の模様をお話ししよう。

マールブルクは人口四万五千の小さい町だが、大学町として古くから知られている。ライン河に臨んで、北に起伏する丘陵には石造や木造の古風な家が並んでいる。町全体がキレイに掃除してあって、美しく静かである。丘の上に王侯フィリップの城がある。大学は十六世紀にフィリップが始めた学校で、正確にはフィリップス・ユニヴァーシティーというのである。大学の近くにエリザベス・キルへのゴシックの尖塔が聳えている。

会議の開会式は丘の上の王侯の城の「騎士の間」で催された。インドからもパキスタンからもセイロンからもアメリカからもイタリーからもエジプトからも、二十九カ国の国々からそれぞれの代表が五百人以上も思い思いの服装で、集ってきた。とくに印度代表の服装は、男女とも異彩を放っていた。

開会式はベートヴェンのソナタに始まって、ヘッセン州の教養大臣や市長など多勢

の人々の祝辞や挨拶があったが、そのうちハイラー博士と三笠宮様の挨拶が特に印象に残っているから、それだけを書いておこう。ハイラー博士はこんどの大会の事実上の会長で、一昨年日本へも来たことがある人。キリスト教以外のあらゆる宗教の真理性をも寛大に注目して、宗教の本質を把握しようとしている。この人の人柄と思想傾向がこんどの大会にも、大いに影響を与えている。博士はマールブルクの教会や大学の歴史を語ったあとで、この大学に宗教史の講座を開設したルドルフ・オットーの学的功勞を讃えて、キリスト教以外の宗教世界への目を開いてくれたのはオットーであるといった。(オットー今は亡いが、現代の代表的宗教哲学者として日本の学界にも親まれている。)オットーの関心は諸宗教を交渉させて、人類の最高の目的である社会協調の世界平和のために、諸宗教を帰一することであったが、ハイラーもこの思想を受けて、諸宗教の協力する社会が、国際連合やユネスコ以上に、最も広い意味で、全人類統一の意識を呼び覚まし強化して世界平和に役立たなければならぬ、と強調し

た。「宗教によって、濁りなき調和のなかに、相互の協力が融け合い、政治的緊張と分裂の彼方に、精神の領域が現われる。全人類はそこでのみ不可分の統一に結ばなければならない。」ハイラーは終りに、アソカ王の「寛容の刻文」をサンスクリットで読んで挨拶を結んだ、それは「他の宗教の教えにも耳を傾けよ。」というのである。

翌日のオーベル・ヘッセニツシュ・プレッセというヘッセン州の新聞は写真入りで、開会式の模様を報じたが、このアソカ王の刻文は、日本式に言うなら、五段抜きトップ記事で、ゴチックの大見出しになっていた。

三笠宮はドイツ語で十五分ほど挨拶をなさった。その要旨は、現代の国際関係の不詳事は経済的な原因に基くことが多いが、むしろ精神的な要素が重要な役割を演じているのである。ヒロシマやナガサキの非劇は人間が自らの手でもたらした悲劇である。宗教的な英知と愛だけがこうした不詳事を回避することができるのであろう。というのであった。たいへんに明瞭なドイツ

語で挨拶が終ると、五百人ほどの聴衆は万雷の拍手を送って、しばらくは鳴りも止まなかった。こんどの三笠宮の名誉総裁としての役割は、この会議に大きな比重を持っていた、權威を重んずるドイツ人の、プリッツ・ミカサに対する敬愛はたいへんなもので、マールブルクでは一種の日本ブームを捲き起したのも、宮様の人気の結果であった。われわれも宮様のお蔭で、会議後の一週間の旅行を、国賓待遇のお相伴をして、楽しく過すことができた。

終りに会議の様子を一言すると、会議は七部会に分れて、キリスト教、仏教、インドというようにそれぞれの専門の分科会で、研究の結果や意見を述べ、討議をした。予め、「世界の初めと終り」という共通の課題が出ていて、原子力戦争によって世界の終りが近づいているともいえる現代において、諸宗教はそれぞれの立場から、この危機を如何に避けるように努力するかとができるか、という問題について意見が聞かされた。わたくしども三人は浄土教の立場からそれぞれ所見を述べたわけである。その詳細については、別の機会に譲ろう。

ほんとうのもの



合 田 徵 雪

ほんとうのもの

昨秋十一月四日の午後、広島市で催された「横山大観展」を見終え、帰郷すべく乗車。

汽車は二等車だったがやがて岩国駅で、私の座席の前にいた二人の若い、紅燈情緒の女性が下車した。その折、一人が読んでいた小さな書籍を置き忘れた。あとに席をしめた工員風の男が、多少の好奇で取上げ、パラパラと本の頁をめくったが、すぐ興ざめした面持で、窓辺にほうり上げた。

それを私もつい気まぐれに手にしてみ、ハッとおどろいた。何と倉田百三氏の「愛と認識との出発」であった。

二人の女性というのは、一人は病的にまで顔青白の美人で、グレーのレインコートの下から黒のセーターをのぞかせ、いま一人は対照的に健康そうな顔立ちだが、これもやはり黒いスーツの衿元から透明なブラウスをチラつかせているという、皮肉なまでに粹好み。というのは二人ともまだ十八か十九とおぼゆる少女だったから。しかも髪は今流行とかいう高々と盛上げたもの。それに病的な方は白っぽいピンクの口紅で唇をザラつかせ、健康的

な方は濃エンヂの口紅が剥げかかっていた。そして病的娘に、

「頭がいたい……。」

ともたれさせたまま、健康娘の不乱に目を注いでいたのが、「愛と認識との出発」。

昨春大学に入っただばかりの私の娘と同じ年頃で、はや人の世の裏街まで知りそめたらしいあの少女が、こんな本を愛読していると。

私は、承元の昔法然上人遠流の途、播磨路で弥陀のみ教えを請うた老漁夫と一遊女との、いみちくも麗しい故事を思い出した。あの時の漁夫と遊女との一言一句、上人とともにありと、頭のさがるばかりである。

当日見てきた「大観展」の会場で、監視員である金ボタンのアルバイト学生が、これもセーラ服の同じアルバイト女学生に、無邪気に語っていた。

「こんなにもったい振った取扱いをしなかったら、反って抵抗を感じないで、これ等の絵の良さに溶け込めるだろうに。」

すると、長杖ついて殊勝げに出品画と対立していた白髪老人がデロリと眼光鋭く振返っ

たが……。

さてこの老人が、大観画伯の名も知らず、これ等の中の一枚が、表装もせず絵だけのままで、何処かのクズ籠の中につっこんであったと仮定しよう、

「オヤこの山ひだの描方は、たしかに一風ある。木の葉の色一つにしても、ただ事では無い。イヤそんな末端など如何でもいい。もっと威大な、我々の胸に迫ってくるものがある……」

と、ていねいに紙のしわをのばし始めるのは学生の方かも知れない。が、老人の方はチラリと一瞥しただけで、

「素人画だ。このギコチない筆致からして……。」

と片付けてしまわぬと如何して断定が下されよう。

その頃私の市で、都土出身の青年抽象画家の、新鮮その物の如き個展も行われていた。最近の我国一流美術雑誌でも特に問題視し、原色大版口絵にまで載せている田中稔之といふ、この新進鋭の芸術家に、ある偶然の機会に、私の所持していた重く分厚の「古仏像

集」を見せた。するとその反応は予想以上で

「素朴、虚飾を捨てた赤裸々な、そして強烈な真実。歴史はくりかえされる。良い物は、いつの世にもいいですね。」

という謙虚さである。とかく人間、己の歩んでいる道だけしか、見えないものなのに。

自分の好きな画題だから、有名な画家だから、高値で売れる絵だから等の雑念から離れて、ただ清廉無垢な心で接した時、やがて抽象具象の差別なく、いいものはいいと、み仏の普遍的な慈悲にも似た、水の低きに流るる如く、いと自然な理解の光りに、開眼されてゆく。

その晩にこそ大観画伯の絵に、より深く純粹な敬愛を感じ、その貴重な画業に、惜しめない涙を捧げ得るのではあるまいか。

私は右の中、ただ簡単に「清廉無垢な心で接した時」と申したが、そうした心に到達するには、上人のお袖にすぎた漁夫・遊女と同時に「愛と認識との出発」を読んでいた少女の態度からも学ばねばならぬと思う。

絵筆を玩ぶ者も賞美する者も、日本画・洋画の垣など取除き、東西古今の優れた作や絵

画史をたづねるにも、上滑りの博識に止らぬ様、心した上にも心し、深く現実をつかみ、正しい精進の蓄積を心がけたい。

俗界を騒然とさせている「永仁の壺」「藤原秀能の書」事件等々も、真偽の穿鑿如きより、従に古きを過大評価し、現実を粗かにし過ぎる愚にも反省をし、「本当にどれ位の良さか」と冷静に凝視する時、おのづと解決される問題ではないだろうか。

クズ籠の中にも

右文中「表装もせず絵だけのままで、クズ籠の中につつ込んであったと仮定……」という思いつきを書きましたが、実際それに似た事がありました。

ある破産者が自殺し、その遺宅を訪れた債権者の一人が、クズ籠の中からモミクシャになつた小品画を発見、なかなかの傑作でどうも渡辺華山らしいので、それだけを持帰り、華山の孫に当る東京在の華石画伯宛に鑑定を依頼しました。そしてじき届いた真筆保証書と共に絵も表装して、お気の毒な遺族に贈った処、かなりの生活費に充てられる程の値段

で売れたとの礼状が来ましたと。後その奇特者は華石氏と昵懇になり、今も華山や華石（すでに故人）の絵が数点残っていると。面白いのは其の家から華石氏へ土地でとれた小エビの乾物を贈りましたところ「いちいちエビの皮をとられて大変でしたしょう」と非常に恐縮されましたと。小さい乾エビのカラーは簡単にとれますのに、明るい一つの話。

ギセイ者こそ迷惑

もう一つ「遇然の機会に古仏集……」と書きました通り、実はあの本は他の人に見せるべく持参、途中青年画家の個展会場に置忘れていたのです。

あの本を見せて、夫から省みられなさ過ぎるある不幸な夫人やお子さんを慰め、加えて事業に敏腕を振り過ぎる夫君の目にも、皮肉にとれぬ様に触れしめ、極く自然のうちに反省をうながし得たらと、右書籍の中に次の原稿をも挿入しておきました。

（「古仏像集」に就ての感想。テレビ「棟方志功夫人」を観る）

「妻は何でもよくやる。記憶力のたしかな事も大変なもんだよ。だが僕は……、からきし駄目だ」天真爛漫、大声で「浮気？してきただよ。今だって……イヤもう駄目かな？否々まえたってそうはしなかったよ、人みたいにさ」など、恥も外聞もなくまくしたてている傍で夫人はただ黙々と、全然関せず焉。画伯の作品の荷造りや、また買出しに一心不乱。

若いお手伝いとお二人で。「先生の豊満な女性像は、奥様がモデルですか？」「いやあモデルなんか無いよ」。もう一人の女性は、どうやら画伯のお嬢さんらしい。母君に以て肉付きよく色白で、非常に好感を抱かせるのに服装が質素なせいか、インタビュールしている婦人記者には黙殺されている。「僕は悲しみが出せない。これが出せたらなあ……」とさも残念そう。曾ての赤貧時代の苦勞も夫人に任せ。修業が云々といっても、幼児だって好きな玩具を与えれば、一時的ながら寝食も忘れる。仮りに今、夫人に死なれたら？「ウワ！ツおれは悲しいよ。……だが泣いてばかりも居れない。まだまだ仕事がある」。然し若し令嬢に先立たれたとしたらきっと家の奥の

押入れか何かに頭を突込み、涙でびしょ濡れになって、仲々出て来られないだろう。「もう制作なんかしない。アー娘が生きているうちに、ああもしてやりたかった。こうもして……」。その時初めて画伯も氣附かれるだろう。これまでの、女性像のモデルのすべてが、実は外ならぬ最愛の娘だったと。

（欺くて其の後における氏の作品こそ、大慈大悲の古仏のあれこれの如く、更にいみじくもゆかしい光輝を放ち始めるだろう。）

実際の棟方氏は、右のコジツケ話だと遠く及ばぬ、大きい人物だという事は、本誌の読者なら、とくとご承知でしょうし、人助けとあらば画伯も苦笑一つでお赦し願えましょうと、失礼にも甘えさせていただきました。その実業家夫婦に及ぼした影響の程はあまり長くなりますのでまた次に。

×

×

×

×

扉の御法語

ある人が上人にこう質ねました。

「私たちはフト気がついてみると悪いことを考えています。いやそれより善を行えと申されてもとてもできないことです。私たちが特に悪事を働かず、どうやら人さまのご迷惑をかけずにいるのは、お恥しいことです。が、仏さまに対してということではなく、人目を考え世間態が悪いからに外ありません。偽善とまでいわなくても、本心に反して行動しているに過ぎません。だから私たちは、自分の心のままに振舞ってもよいのでしょうか」

まことに平凡な、正直な質問といえるでしょう。誰もが同じ悩みを持っていて、この人のようにそのまま、上人にお質ねできるほうが、生活に対する真剣さがあると思います。簡単なことながら人間の根本にふれるこの質問について、上人は温かく教えられました。

「人から賞められるために、また外聞を考えて行動する事はたしかにあります。しか

し悪いことをしたくないと念じて、たとえば心の中に良からぬことを考えても、行動にまで現わさない事は、即ち仏さまに対して耻る心があるからです。仏の慈悲がたまねく行き渡るからと申して、だから悪事をするのだという人がもしあるとすれば、その人は仏の慈悲を受けることのできない人です。ご両親にしろ、ご主人にしろ、悪事をしりぞけ、善事を行うよう願っています。

たとえ悪人であっても、阿弥陀さまの本願を信じて、お念仏を唱えれば極楽往生は疑いありません。これが阿弥陀さまの本願であり、お慈悲であります。が、それだけにまた阿弥陀さまは、善人に対していかばかり多くのお喜びをおもち下さるかということになります。従って本願を信ずるならばそれだけ善事にはげむように心掛けるのが道理というものです。一念十念のお念仏ですら往生できると信仰するなら、百念でも心の及ぶかぎり、身体で努力のできる限り心も身も励げましてお念仏を申なくてはなりません。

たとえ身体も壮健で、七八十才やそれ以上の長寿を保つこと疑いなしという人であ

っても、過ぎてしまえば一朝の夢のようなものです。いわんや事實は老少不定で、いつ命を落すとも、いつ病いに伏すともはかり知れません。常に後世を期し、臨終のおもいをなして、寝るにつけ起きるにつけ、十念を唱えなければいけません。これは即ちただ一すぢに念仏すべしということであります」

この上人のお答えを要約すれば「とにかくにも悪をしのびて、念仏の功をつむべき也」であります。

さて前述の質問をもしキリスト教から答えたとしたら、「神のおほしめし、つまり神の意に逆くかどうか」の点から説かれるでしょう。五戒は神の命令であり、この命令に逆くものは神から罰せられます。

上人は、「神」なる権威者をかさにきることをしてしません。あくまでも人間の姿をみつめ、素直に往生を願われます。「善人悪人をもわかつたず」であり、「智慧のまなこある者」も「愚癡のやみふかきもの」も「目しいたるものも、目あきたるものも」と、すべてを同列に取り扱い、区別なく考えて上人は答えています。

浄土の会員を一人でも多く

◆どなたでも会員になれます。

◆会費は年額六〇〇円です。

◆会員には毎月浄土を配布します。

◆この会は皆様の会ですからその発展の為に

お一人でも多くの会員をつくって、正しい

信仰運動をひろめましょう。

お知合の方にぜひおすすめて下さい。

◆お申込は振替（東京八二一八七番）を御利

用下さい。

東京都品川区上大崎一の七八二

法然上人鑽仰会

今年も「浄土」で明るい生活を

「浄土」購読規定

一部 定価 金五十円

（送料 四円）

会費一力年

金六〇〇円

（送料不要）

浄土

正月号

昭和十年五月廿日

第三種郵便物認可

昭和三十五年十二月廿五日 印刷

昭和三十六年一月一日 発行

定価 五十円

編集人

村瀬 秀雄

発行人

佐藤 密雄

印刷人

神谷 秀雄

印刷所

神谷印刷株式会社

発行所

法然上人鑽仰会

東京都品川区上大崎一ノ七八二

振替東京八二一八七番

日本一の生産・設備

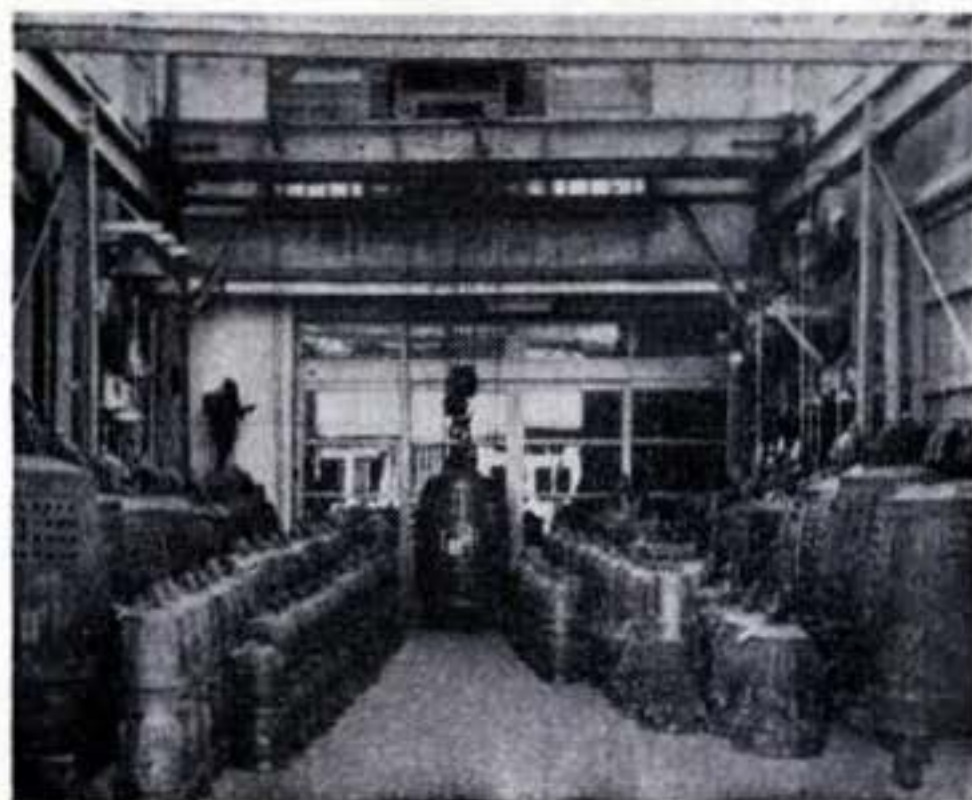
梵鐘 (54cm~85cm)

在庫豊富

喚鐘 (21cm~51cm)

音響理 学博士青木一郎先生

梵鐘界の権威 日展 参事 香取正彦先生
芸術院賞受賞



日本最初の黄綬褒賞
(昭和三十年四月廿七日)
鑄物師 老子次右衛門翁

大阪市北区曹根崎町一丁目

大阪ヨリ十五分 (梅田新道大映横東へ一丁右側)

株式会社 老子製作所 大阪支店

電話大阪 (34) 8847番 本社工場 高岡市横田

中村元 (東大)・増谷文雄 (東京外大) 編集
ジョセフ・M北川 (シカゴ大)

現代 仏教名著全集 全十巻 予約募集

A5版 四三〇頁
八ポ 二段組
価 各 八〇〇円
〒最底小包料金
全払 七、〇〇〇円

一、東洋文化の粹、仏教研究の精華を
集成した現代の大蔵経
二、現代仏教の研究成果はこれだけ読
めばその全貌が解る (四十篇余収
録)
三、貴重な絶版ものや得難い書籍がま
とめて安価に得られる

第一回 第八巻 好評発売中

日本の仏教 (3) 圭室諦成 『日本仏教史概説』
中村 元 『近世日本における批判的精
神の一考察』

第二回 第三巻 一月中旬配本

印度の仏教 (2) 宇井伯寿 『印度哲学研究』の諸篇
木村泰賢 『小乗仏教思想論』

第三回 第九巻 三月下旬配本

仏教一般 (1) 島地大等 『天台教学史』
梶尾祥雲 『秘密仏教史』

隆文館

東京都千代田区神田佐久間町二の一
振替 東京 一五三一〇二番
電話 (八六六) 一一〇 一一五番

高級アンチモニー美術工芸品創作

実物そのままの製品を

頒布品
記念品
御土産品
に

御用命を受け賜わります



国宝 鎌倉の大仏
(弊社謹製品の一例)

大西物産株式会社

東京都台東区神吉町三五
電話 (841) 一〇八八 (871) 六〇二四